

伽羅先代萩

作者 高橋武兵衛 四
吉田角丸

○ 第一章

天地の開始めし昔より、今にかわらぬ妹とせのちぎりの、末の樂しみは女夫ぐらしの世帶事、手鍋提るが眞實の、誠の戀の陸言や、五十四郡の役主冠者太郎義綱公、今日吉辰の宿這入都はなれし舟岡の、山の麓よ手を盡しきらを、みがきしくすやふき勝手賑ふ客もふけ、島原よ名も高尾とて、盛あらそふ太夫職手づからかしく、白水も流の粹なたすきがけ。大將はまな板えきざむ鑰も五分切の、國分煙草を禿の楓、お氣がつけふと長烟管、ゴヨヤよふ氣が付た、シ太夫、キこちの女房ども、そなたもさつきよから米洗ふて、定めて肩がつかよふ、アレ一休したがよい、アレ私より

稲様の仕付もなされぬ切きぎみ喰ふ肩が痛ませう、よつ程久しう洗ふ
 たりや是で大かたよいで有、是からお粥あわをしあげふと云々楓が小利口
 よ、二人してかく米かし桶、二つべつるよ金の盞、玉をのべたる玉だす、
 伽羅割きやらわりよりも持ぬ手又割木のそげもいたく、し奥おちよ太鼓、やり手の裏、
 ャレく、お二人様ながら喰さお嬉うれしうございませうな、サア此様そんよお目出たう、
 宿這入しゆりゆの祝儀しゆぎよよばれるといふ事ことはんよ、此頓吉太鼓冥加めいがよ
 叶かなふたといふ物のふお夏なつ、ティ私も大勢おほぜの太夫様方とうふさまをまひしたれど、此様
 よ内かたへくるといふ、是が始はじだんくとお居くろめなされて、お二
 人の中よ和子様わこさまも出来る様よう、アヤウ太夫様とうふさまの笠かさの下したがきつふくすぼるぞ
 へ、そして何次ほどややらむしやうよいよはいが、ドレくどふでよふ炊たきひる
 んすまい、シレ其火吹竹ひふきたけといふ物ものを、モ堅かたい木炭もくたんやコレ顛吉様見みやしやんせ、
 ナアこりや堅かたい箸はしや伽羅きやらのふし木炭もくたんや、どふでもお大名の宿這入れ

違ふた物じや、極樂世界と喜見城、彼唐士の阿房宮、三千世界より有とわら
ゆる結構づくしをあつめても、又と有まい指向い大方かゆれ金色のぼ
さつの世話事床がため、に新宅の地形がため、乍め目出たくの若松様よ、
枝も榮る葉もえげるお目出たいいよのお目出たい千秋萬歳く万余
歳ノ、ト頤吉目出たいく、皆知てゐる通此高尾が突出から逢かしつて、
毎晩く通ひ詰る此義綱、せまい廊の居續よとんと氣がつまり切どふ
ぞ氣の替つた事がしたいと思ふ内ノ錦戸刑部といふは誠はおれが伯
父なれど、今でハ家老同然、流石血筋程有て顔よ似合ぬ粹親仁、此様よ家
を立て太夫とおれとたつた二人百姓と云者の眞似をして、大名事ハ忘
れて仕まへと、あれがすしめよ爰へ引越、わいらをお客よおれが料理、太
夫も今朝からせい出して、米洗ふたりかゆ焼たりノ大躰面白い事じや
ない、こんな事ならとふから百姓よ成物を、何の因果で大名よ生れた事

じや、ア第一何を云付ても、アレといふて何一つないといふ事のない其
 不自由さ、女子供は女子供で曲輪のはりとり違ふて、爰へこい。ア帶とけ
 ブ足上いうと此様思ふ様物事がいて、モ世も生てゐる甲斐はな
 い、ヤほんと若人達も嘸退屈、シ太夫、家渡がゆが出来たらお客がたを奥
 の間へおりや膳立と何事も珍らし盛りたわいなく、そんなら奥でお祝
 ひやそふ、アレくこちへと打連て、奥の座敷へ入しける、折から表脇ひて、彼
 船岡のく、アレサ宿這入の門よ、アレサお目出たいやんらお目出たい。
ロチイヨイヨチイヨチイ、アレワサノエ、イトコエ、コレハサンエ、イトコナ、
 もしも山の手のてんから大事の小娘
 が落たら喧嘩成まいか、
ロチイヨチイ よいくよいやな聲も揃への染頭巾、坂
 道を押大八車門口も引付いて、開新宅の祝儀も一つ玄めましよ、よい
 く、モ一つせひ、ヨイ祝ふて三度、ヨイめつたむせうと目出たがる、顔は
ドシキヤ、ドシキヤ刑部か珍らしい洒落姿跡なは荒灘風之助車も乗せたれアヤ何ぞ

や、今日殿様高尾様、宿這入の毒き刑部様より家見車又つみし
金子の箱に心付たる音物、内へかき入よばつと皆く立寄て數
も限らぬ千兩箱、つみ上く上板もじはる計々並べおく、義綱公は打詠
、粹な刑部が進物なら何ぞ面白い器物で有ど、樂んでいたゝ金子の箱
といふ、見た所が面白ふもない物、ア何の役々立物じやど、不興ふ刑部兩
手を突、御誕生有て外を御存なき御身、不審御尤某がお進めり
今日只今百姓どふ成なざるれど、只今迄どひ達ひ殿と高尾殿とお二人
よて、世帶方をなされねばならぬ、其世帶どゆは、いらで叶ひぬ物は金
掛屋方へナ付、ノ箱の中よ千兩づゝ、金高ハ三万兩、ナ其様云ても、其金
とやらいふ物を、どふするの玄や合點が行ぬ、ア其義は荒灘めがナ上奉
らん、何事も存なき殿様、今迄ハ家老方、小性近習用人など、あ
また役人承り、何から何迄致せ共、是からハ自身又世帶方をなされヌ

やならぬ先第一の立物の米是も今日より米屋とヤ物の方へ、太夫様でも
お出なされ、彼米屋より五升でも一斗でも、かますといふ物又入て持て
参夫を飯と掠るより薪とヤ物を遣みやならぬ、其まきやみて、和らか炭
一俵、是の早く火がおこり、女中方又は調法な物、夫の味噌、鹽、醤油、現金で
ハ拵せんしる物、そこで是を置替とヤ物又呑込せ、先千兩箱一つ二つ、先
々へ預て置、夫からお二人差向ひで遊んでい喰みては遊びうかくと
する内に三十日といふ恐しる物が來ると、書出しが云物を持って常々笑
顔のよい親仁が、其日は急よこひい頬、其時又アノ金箱、其儘でいつかれ
れぬ、四文錢と云物又取かへて、さらりと拂ふて仕まふ、又金がない
時又の質といふ物を置ねばならぬ、是が又重寶な物、代物を持って行と錢
でも金でも二朱銀でも、望次第よかへておこす、まとく荒灘大概り
承知したが、今の質の所が大分面白いた金を早ふ皆みして、其質が早ふ

じて見たい。又何よもなふ成たりや。其時は此刑部が掛屋方へナ付
何万兩でも差上るハテ金といふ物ハ澤山たくさん有物じやな。せつかいやうは
覺たく。今云た米やまき、そして味噌鹽とやらいふ物、荒灘ちよつと
買かて見せ、い、かしこさり畏奉るハ、白米壹斗まいまさ四五把わ和わカ炭一俵ね此直段だんがかふ
と千兩ぐらゐで有で有い家來中手譯わけして追付買まづけかぶて參まつらんと金箱かた
け立出る、家來がしめる草鞋あらわらのはるかの里へと出て行、すれ違ふたるま
かい道夫者それじやうと見へる本田わけ、一つ又合す裏うちゑりも黒くろい顔付おほら三浦屋才
助さすけ、うろく見廻す門の口のど、ちと物がお尋たずやたい、若爰わいらみ冠者くわいじや太郎義綱
様さまといふ、お大名の店越たてごしへござりませぬかキア太夫だゆうか、才助様みすけさまよふお出
マ義様ぎさまも夫めよござるか、高尾たかおが親方、何と思ふて、何と思ふてとは、お
前まへはくくくめつそなお方かたじや、此親方おおきなよも得心とくじんさせず、禿かむろやり手迄
引連ひきつれて大門だいもんへも斷ことわりなし、行方おほが知しぬ故ゆゑ、こちの内うちへ上うへを下くだへとませかへ

す中より去方から高尾を身請言て來ても肝心の玉が知れぬで方よりへ尋
 歩此才助、サアく高尾早ふこい、但しは高尾が身請金今請取れば云分なし、
 あちらへ遣ふか、金渡すか、サアくどふぢやと高聲りお定り成せりふ也、ヤリ
 才助、わが云事れどんとわからぬ、高尾のあれと宿這入したればどつこ
 いもやる事ならぬ、サアそんなら身請なさるゝか、其身請どり何の事亥
 や、サア身請と云ひ太夫が身の代じろ、其身の代じろ、合点の悪いヨレ太夫を
 爰あきみ置度たてば、金を此才助より渡しなされどヤ事、金かはどめ初からそふいへ
 パ濟事をよし、其つんで有金をのぞみ望次第きつけ持ていねど、仰おあせ見付る千兩箱よ
 キアく世よの末ま世よ及まんでも有所より有物亥いやな、亥いたがあんまり金過かねすぎ
 直ただの云出し様がない、かうつ三百兩では、ヤくあんまり安い六百兩
 かい六百兩ではもうけがすくない、いつそ飛と千兩か、夫おもどふや
 ら安そふな、ヨロヤと云ふと目もうろく、金よりむせるぞ道理なり、刑部

聲かけ、さく才助とやら、何をうろく、誰有ふ冠者太郎義綱公の後臺所
よ定る高尾殿の身請、いか程と極めてハ世間の聞へ、夫々積だる千兩箱、
其方が力次第持れるだけ持て歸れと、云々才助猶惚り、夢でハないか夢
みでも、こんな嬉しゐ有難い甘い事が有物かだとへかいなハ折る共、存
分取らいでおくべきかと薪の繩切是幸金箱手早よ七つ八つ、まつかと
くしり肩腰入、上てもく、いつかなゝ、爰らが男の志んぼうと、惣身の
力を肩よ入心ひやたけとはやれ共次第く、又精根つき息切目廻あせ
たらく、又、扱もく此様な因果な事が有物か實の山へ入ながら持事
ならぬは金持よ、なられぬといふ印かと涙乍らよこつてく、取へぐ箱
のうちめしく殘多げよ漸と一つかたげる一人言ひよろく、
玄てぞ立ち歸る、とも扱もよはいやつて、是では又へらし様を工夫
せず成まい刑部も奥へ、太夫もお玄やど、うつかりかんくの後大將

金花咲陸奥ひちを、心がけたる錦戸にしきどが、いざに入いりと打連うちいれて奥おくの一間いつまん入いりよけ
 り、山道さんじゆも都みやこなれペや和らかス、育そだちがらなる風俗ふうぞくに十七八の角びたい貝かい
 田た勘解由直勝かげゆ なおかつが一子源之助いっし げんのすけ、立派作りょうせづくりの大小かほひしも、角菱立かくひしらぬのつとり顔おほほ、跡あとよ
 付添つきそえぼつとりは、伊達明衡だて あきひらが娘松嶋、夫婦ふうふといふは名計なけいのまだ盛ますり見み
 腳躅わらわ山、姫家來こじまとへかたへゝ残のこし、打連うちいれ来る庵いはりの戸口とぐち、嗣源之助様けい、道々みちも
 や通り、殿様だいじやくの惰弱だらぢやくの身持みじめ、國くによびざる眞ま様じやくから、と意見いんべんナ上あよと竊ひそかの
 美うつくし、舅おじ様じやくへナ上あても聞入きいれなく、と諫言かんげんもなされぬは、どう思召おもなわふ心こころやら
 あんまり心ならぬ故及ゆきずながら殿様だいじやくへナ意見いんべんをナ上あふと思ふても女
 の身、お前まへを楯たてみ云いふ爲ため、最前さいぜんからナた事こと、よふ覺おぼへなされましたがヘキア
 ミヤ、先まへから云いつた事こと餘あまり長ながくて一つも覺おぼへぬぞや、モソ大慨たいがいな事ことな
 ら覺おぼさせずとよしよ志しやいのふ、つんと譯わけもない事こと計けい、コレ最前さいぜんから
 やた通り、こまちやくむづかしゐ事ことじや故ゆゑちうで、覺おぼぬ、こたしなみ

持てゐる。鼻紙袋の石筆。今一遍云て聞しや、サ殿様のお身持放
持、其様よ長ふいふ事へない筋計で跡へおれが胸有、ア一つ殿様
の事をふしてから、サ館へもお歸りなく晝夜をわかぬ放持、よしは
放持の事、もふ是でよい。大概心覺は書いて置た。早く早ふ内へいのふ、
又何をおつしやるぞいのふ、殿のほ目よもかしらぬ先、内へ歸てよい
物かいな、ほんよそふじやのふ、申必行儀やう、何よもお忘なされ
など伴ひ這入門の口、誰そお取次頼ましよと、音なふ聲よ奥とも立出る
錦戸刑部、貝田の子息源之助、松島との夫婦連、扱は殿の機嫌窺ふ
出の様子某が後程宣敷披露せんといへど答へもうつかりひよん、松島
の氣の毒さ、源之助様、刑部様へは挨拶、夫早ふおつしやりませゆく
と氣をもめば、挨拶どの何の事じや、ほんよしん氣な事で、有ぞ、ア
下へふすわりなされませ、夫な行儀よ兩手を疊へついて、呑込んだ。

と、かしこまつて手をつかへ、ア何とやら、夫々思ひ出したと懷る、以前の書付取出し打詠、一つ殿様の事、殿様が何と致した、そふしてからアほ放埒の事、何ほ放埒とハシテ、其跡ハ何やらで有たが、夫々覺ぬ、あらく斯の如く也、松嶋と譯もなき傍よりひとり氣をもむ松島、錦戸刑部又が笑ひ、ハ、親々似ぬ發明人、何の事やら分らねど、ほ放埒といふからハ殿へほ諫言との事ならん、こりや松嶋の付智惠で有ふ、其方の實父伊達明衡、國家老を鼻よかけや越たよ違ひない、此刑部は別腹故家臣の列、加へれ共、まさしく義綱公の爲よ現在の伯父異見してよけれバ某が諫言する、いらざる女の忠義立、早歸りやれと傍若無人、横紙破り、松島も何と詞もなき折から、荒くれ男の天窓付のけぞりびんもまさかりよくしり付たる夏紅葉、遠慮會釋も門の口、ずつと這入て上り口、今日の爰よ大金持の宿這入が有て、榮耀榮花のほたへ次第

奢次第と聞た故、どふで薪でもついた物で、賣まいと思ひ付た此紅葉、賣み來た此男、サア買て貰ひましよ買て下んせと云も一曲有頬付、錦戸きつと見、己の先年義綱公の諫言して、用ひなきをいきどをり、白晝又國を立退し熊川源五兵衛、聞へた浪人のかて、よつき家をゆすり、商賣古への主共知らず百姓町人と心得慮外千五、錦戸刑部が前共云ず狂氣自然のびらう者と、きめ付れど、びく共せず、ぐつぐつ吹出し、ナムかしたり腹の皮三千世界の主君がなければこゝい物のない此熊川、慮外と云るゝ事へないぞ、三度諫めて身しりぞくと古語又引かへ、百度千度の諫言も傍え付添ふ僕入原めが、さしひこさい云廻し剩へに前を遠りよ、やら腹立、妻子を連四年以來浪人住居聞くまいと思ふ程彌々聞へる殿の放時、其元は傾城め故、此紅葉は高尾の名物、是眞此様よ打切て仕舞が、主君の目覺しお家の爲、寵愛の女を手みかけし殿が腹を立られ

ふがどんぼうがへりしられやうが、そちらのかまひぬ源五兵衛、國々殘て明衡定倉兩人が、知らず顔へ知行が惜しき、といつもこいつも祿盜人めかつしても盜泉の水餚等と一ツも呑ぬ某、サア傾城めを爰へ出せ留だてするも相伴え此まさかりでから竹割、病の根を切一療治と不忠の良薬熊川がよがいをしめぞ手ひとけれア云して置ば様シのたは言早立歸れと引立る手先を擱んで引かつぎ、眞逆様えづでんどう、もふ敷されぬと刀の鯉口こいぐち暫く待れよ刑部殿熊川氏も早まられなど、得る戸口戸口え貝田勘解由、二人が中々分入て委細いざなみ一々承うけたまひる、熊川殿の忠節、あつわく其方國元を出られて、某竊ひそかみほ諫言ナセ共情なや、合、いれ聞入なき其元、國々殘る明衡定倉此貝田を忌きらる、シ前を遠のけん爲奢おぜりを進め込、用金を主君おもべあてがい稻妻いなづま郷助ごうすけといふ筋無者をほ傍そば、付置つけおきに情弱だじやくを進る、兩人が心こころ一物有ん、某は傍そばを放なばいか成珍事さんじも出來らん兎角

時節を見合さんと、心又入事のみに諫言もやさぬは、傍を放れまい
爲心を盡せ共、誰有て片腕とする忠臣なく様に心をいためる此時節、
思はずも熊川殿此所へ來られしに某が身の大慶此上やあるべき、是より
兩人心を合せ僕人逆臣の奴原一と退玄りぞけんに我方寸の内又有
り、バ、忝なや嬉しやと誠をあらはす忠義の詞源五兵衛も納得し、忠義
の爲とふいやれバ何國迄も立ぬく熊川、定倉又もせよ明衡又もせよ逆
意と有。バ國へ立越摠殺す又何の手間隙。此儘又國元へとつゝ立上る
せいきう者。バ、せいで返つてお爲ならず、一ト先我家へ立越有、諸事
の密談アレバ勘解由、そりや何事向ふ見ずのア熊川、こなたの屋敷へ連歸
り密談とい此刑部へ呑込ぬ。イヤ何事も此貝田が、お家の爲又心を碎く仕
上の跡みて、ナ、松島も諸共又熊川殿を供ナセ早く。と諫めの詞
心ならぬど松島が、ナ、案内サ源之助様、ムもふいぬのかヤレくほつと退

届いた。シタガあの強い人が出たのでどふやらちつと氣が晴た。アくいなふ
 と先よ立、然らば貴殿のお屋敷へ委細あれど勘解由が式禮熊川
 ハ皆打連て出て行跡よ錦戸不思議の顔色。シサ勘解由兼某と心を合せ、
 義綱を嘘氣よ仕込忠臣の奴原よあいそつかさせ取て押込鶴喜代よ跡
 目を願ひ後見と成て一家中を味方よ付其上で鶴喜代をなき物よせん
 と日比の計略大概よ出來かしつた所、忠義立する。熊川ボリ取込だ我心
 ハ殿の爲とたらし込國よ有伊達泉兩人を片付させべ跡よ氣ふさいな
 者もない五十四郡の心の儘、只何事も我胸よちつ共氣遣ひあられなど、
 悪事よかたまる詞の下宙を飛で稻妻郷助息を計りよ欠來り斯と見る
 る兩手を突。ヤア此兩人共是よは入殿様の用有てお館へ參し所何か
 知らず國元よ早馬早駕籠上を下、何分殿様がは座なくては存じ息を
 切て立歸ると云もひい／＼すた／＼息。サ出かしたく、我よがは供

人の目立ひだりに爲めならず汝おのの館やかたへ裏口うらぐちと片時かたどきも早く供そなへせ、早く
よ稻妻いなづまが、はつと計そなへよ奥おくの方、折柄おりがら歸る風之助錦戸にしきど見るゝヨリヤ荒灘あらなだ日
比ひ云付置おきし、爰こゝ外ほか又供そなへなき冠者太郎跡あとじゆ追付道中おひきみちよて人ひと知しれず討放うちはなせ
ヨリヤ必ひつぬかるな合点あつてんと風之助道かほのみちを早はやめて追おて行ゆ、かゝる所ところへ貝田かいだが若黨わかれ
有村金助ありむら きんすけ色真青いろまき又欠かけ來きり、若旦那わかよしを供そなへし歸かへる麓ふもとの岨傳そよがなひ羽色餘鳥はいりようらぢう又
異なる山鳥さんとり人ひとも恐おそれず岩いわの上うえ元もとよりあはざなき若旦那わかよし手取てとどせんと
されしよ、ばつと立たる跡あとを追お山路やまぢへ追お欠かけ入いり有あとかいくれよ行方あんぽう知し
ず松島様まつしまさまの歎かなきあやまち有あていいかいぞと、熊川殿くまがわだよたのみお頼たのすと、數多あまた
の下部しもぶの手分てぶんして、尋たずる隙ひまよ右うの様子ようすを知しせよ、なん爲暮くわよ及およペペ氣づ
かいしよ旦那だんなよも出で有あと云い捨すてて欠かけりゆ行ゆ刑部けいぶも憚のり貝田勘解由かいだかげゆ心こころおろ
かな我憚おのの古狼野ころうや子この所意しよ成なか、何なよもせよ捨置すてきれず、刑部殿けいぶだよハ義綱ぎのう
有無おののの音連おとづれ相待あわせれよと欠かけり出だ心こころも夕陽ゆふひの日影ひかげを追おふてぞ欠かけり行ゆ岩間いわま谷たに陰かげ

咳搾ふ花踏ちらすいだてん走我子を尋る氣のそゝろ欠行坂中物こそ
 見ゆれと立寄見れば若黨金助のたれ伏たる骸の血まぶれ見るゑくに
 つと怒りの眼主よ忠なきひきやう者と死骸を谷へはつたと蹴込必
 定猪狼の仕業ならんたゞへ天狗の所爲成共大丈夫の一心よ何ぞ求め
 得ざるべき峯をくずし谷をうがつても我子の歎みぢんみなさで置べ
 きかど眼血走氣の半亂欠行こなたの洞穴と習く貝田勘解由汝を侍
 事やも久し對面せんと聲をかけ立出る其形相むぐらの髪を振亂し身
 の白狼の草衣まゆげもれ来る眼の光り、扱ひ家來を害し、惣源之助を
 奪し汝が仕業よな、サ悴が生死白狀せよとばつたと白眼ばよつと笑
 ひ、竹の林よ住虎の勢ひ猛き物なれど、我子の別を悲しみてり千里み
 功有足痿て、一步をなす事あたはずとや、さしもみ勇成貝田なれ共恩愛
 の道捨がたき心を計つて一子を取此山中へつり寄し、犬望の片腕共

頼ん爲の我がはからひ、元某の常陸の大様國香が末子、常陸之助國雄と云者、汝が主人義綱の陸奥守秀衡が嫡孫、我父國香の隣國みて互に武威を争て數度の合戦、軍慮をみがき、軍ニ勝利の時も有又ハ敵の方便ニ乘、^間味方追るゝ折も有、蠶牛の角の争ひも天のなせる運命、いか成猛將勇者成共、叶ハぬ時節かやみくと、秀衡が謀事ニ思はぬ深入伏兵共一度よ起つて亂戦ニ、父を始兄國光宗徒の郎等一騎も残らず討死と聞たる時の我無念、はせ付て父の仇、吊軍せん物と、心にはやれど幼稚の某、頼がたなき人心恩讐の家來も、皆ちりぐ時節謀て秀衡を一太刀恨ん其爲よ跡をくらまし國を立退、六十餘州を變歴し、深山幽谷ニ身をこらし、習ひ覺し妖術幻術魏の孟徳をなやませし、左慈が傳るきたるの妙術、隠るゝ時代芥子とも入また顯はせば天地ニまたがり、心の儘ニ身を變じ、神變きたい心の儘錦戸刑部と心を合せ、國を奪ん汝が胸中計知たる我術

にておびき寄しも心を合せ、禿衛が末孫を討て亡父へ手向ん爲、勇猛智
 謀の汝よ有、我妙術を添るならべ龍よつべきを生するごとし、大望成就
 疑ひなしと、胸中見抜しきたいの曲者くせあらわ、適成汝が詞、我大望を見すかす
 上い何をか包ん、錦戸が工みよ組するは彼が權威をからん爲、事成就せ
 ペ打殺し、五十四郡を手よ擱らば一天四海も一擱冠者つかみ太郎が家よ傳る
 亂髮みだれがみといふ一陽、得々奪ひ身を放さず、刀紛失の次第情弱だじやくの身持、かへつ
 て國へ通達すれペ館の驛ささぎの虛よ乗て、事を謀る方便は様よ、面白やと
 猛惡、又悦ふ國雄も勇立いさみ、心地よし強勇強傑返がうゆうがうけつし、あたふる源之助子孫
 の榮請取れよと、引立出る源之助、親の工みよ夢現別ちつたる家來共退
 と尋見付る人影かげ、お旦那是よ若旦那と立寄下部を拔打ぬきうち、右と左へ踏
 飛あし、あや玄められて、事の破れ只狼おほがみの難なんよ合しと云ふらすも密事の
 血判けつせんやがて再會さうくわいくと、立別たる深山路みさとや、あたりの望のぞみの雲わくらんよ、花咲はなざわま

る躊躇山我家へこそり立歸る

○第二

夜目よきらめく門構門構みがき立たる金物の紋もんも羽をのす竹の丸冠者太郎義綱の上屋敷用心嚴敷拍子木の音もへすみて立んくたり色と酒とようつしなき身うの空うつ蟬せんのもぬけがら高尾が肩かたよ義綱公もつれもつる千鳥足跡つしき付添稻妻荒灘あらなだ門外近く立留りや殿様爰あひがもふお屋敷現あらわないお姿でいふ家來中の見る目も氣の毒心を付遊まわせといへどたわいもふらくねむり、キヤウ高尾様其様そのようも氣の毒がる事ことはない縱よどくなされうが皆殿のお家來計りこいい者は一人もないよ門を開かせんと荒灘あらなだ門の戸びら割さる計けい打うちたしき殿様只今は歸館成きくわんせいぞ、後門を早く開かれいといへどひつそと志づまつて答こたる人もなかりける、荒灘あらなだむくりをよやし、是程これほどもわめいても返事へんじもせぬ寝入ねりてゐ

るな、うぬらが役へ何だと思ふ、ほ門の明立する計では扶持をくらつて
おるでないか、其殿のほ歸館きくわんよ、たわいもない寢とぼけめらと性根付
すの荒灘が門打碎くだひてほ供せうか、ごくどうめらとどつてう聲こゑ、餓せう、騷さわ
ぐほ門内さつと一度よ高挑灯はせ違ふ人音足音思ひがけなく表あらわし拘
り、門内よ聲高く、ほ門番は伊達次郎明衡、子細あつて相勤る所よ理不盡
よ門を開け何どとひ何者成ぞ、先直よ名を名乗なまのれと、詞よ驚天荒灘がはや
てよ逢あひし心地よて皆こゝにく答こたへもなかりけり、聞きへた京童けいわらわんのざれ深く、
田舎武士迎なぶるよな、急度詮議きゅうどせんぎもすべけれど、一大事の評議へいぎ最中其儘
よ打捨置うち捨て置、やく者共ほ門を嚴敷相守きびしくまもれと、聲諸共よ玄める戸の貫木入たる
詞の銛稻妻さやの氣をいため、ごく荒灘、何よもせよ我君を館やかたへほ入いアサす
べ事の様子が氣遣ひな、裏門からほ供せんいせんほ出いとほ手を取、高尾たかおも共
よ氣もそぞろ裾すそもほらく、踏ふかへす裏のほ門へ急ぎ行廻れば道も遠

目から星をあざむく高挑灯、晝かと計人より只うつとりと詠めいる、郷助の證方なさ、門の扉又ひそく聲、此門はどなたのお固め、義綱公は歸館なれ共、表門へ明衡殿は固め故に入叶す。何卒密々此門を御入有様願入と、聲も早く高塙をすつと見越の名も高き和泉小治郎定倉、義綱公の歸館との心得す、此定倉が主君とア、冠者太郎義綱公は五十四郡の主、西より津島の冠者、東より伊達冠者、靜謐の代より國の固め、戰場より出馬の時より百萬騎の大將たり、夫も何ぞや、女童を引連て、ヨリヤ我君を放埒成し世間へ流布せん爲、悪人共のはからいよな錦戸貝田が知らせみてか家の重寶亂髪の刀紛失と追々知らせ必定逆意の者共が騒ぎふ紛れ我君の、身の程も覺束なし、君の館より有共なき共知ざるも又佞人原の心をさぐる一方便と、門を固め此通り見れば足弱を連し旅人と見ゆる、門前より付て人より見咎められぬ様、早く立去りと子細有

げな定倉が、詞と共々門内もひつそと、玄づまり音もなし人を案み相違して、心をいたむる其中より寝ほれ聲成義綱公詞、家老衆の例の堅三、大切がる此門も、島原の大門程より我等嬉しう思ひぬく、又、出口は和らかみが格別、されば廊中先生立のじたくせんより都島原出口の柳、かそやれく、此柳サツサかそやれ此柳、などとやつた所ハタまらぬくと、現たわいもなかりけり、透すきを覗うかひ荒灘が義綱目掛拔刀、目早く稻妻引すりのけ、詞心得ぬ風之助、大恩のじ主君を討奉る極悪人ヨリヤウ、誰ぞと頼れたなク、知た事頼れたが、夫を己と言物か、打放した跡でいふて聞そふ先うぬからと切込刀、まつかせ合ハグ点てんと拔合ハグせ、打合打合ふ白刃しらはと白刃しらは電光石火、稻妻が手練しゅれんよ刀打落され、遂行荒灘しろ後アフタげさニシシ成て死マハてけり、適手柄と小治郎定倉當坐の褒美ほめと殺スこす一通詞、委細ハシメの夫と早行と、詞ハシメ何か白刃しらはの血ち、一先爰を高尾様タケヒヨウとかいゑよげよ小づコトコト引上我妻のじ手

を引もなまめける姿の盛り花紅葉、色よたわいも現なき、君を伴ふ稻妻
が忠義は今よ

○第三

謀計の一端の理潤、神明町と一構の貝田勘解由直勝が屋敷義綱公の館
の内分で目と立花麗の作り、手を盡したる奥の間は、浮べる雲の金襴龍
よつばさの出頭は誰ならんべくも見へざりけり、ちよつと掃のも四五
人が草厭る程廣い間とせまい、女氣陰の間の奉公籌持ながら、コレお綱、此
様と朝から晩迄闊いお屋敷が、廣い京と有りやせまい、爰から近い北
野様へ、一寸と参る事さへ叶ひぬ、どうせへし中へ心もなふ、錦戸刑部
様が三日と上ずお出なされて、旦那様と園の内、何やら二人さしむかい、
人よお隠しなさるゝとふでろくな事での有まい、ちろくでない事云
ふならお館様はうかくと傾城を買過し、此間から行衛が知り、お大名

の欠落でも、館長刀の持人のなし、お供の衆の有まいし、マアあぶない事ぢやないかいのふ、^{ホシ}夫あぶない次手、^アこちの若旦那、船岡山の歸りがけ松島様ふはぐれなされ、運臺野の片わきで、狼よ取まかれてござつたを漸連ましてお歸りなされた、玄かし狼で仕合、^{アマ}うつくしる若旦那、狐などが取巻たら跡がきづ物成のふおむつ、^{サビタ}どこよ思ひ入が有か、熊川とやら云こいの顔な人よ、狐が付てそレろ事、夫を祈しづめると狸の様な山伏がよくてらしい高慢顔、狐やら、狸やら、狼やらであへかへす、狼^{アマ}恐しい、且那様のふ目玉^{アマ}を貰はぬ様と段々と掃除仕ながら次へ行、禊明るどすり足し、脇目もふらず源之助、屋敷の内もあぶく、^アと苦は色かへぬ松島が、跡付添立出をば隠もない大名、太郎冠者有かやい、^アきたかく、^シお前といふの玄やわいのふ、^ア覺^{アハ}の悪い人、^ア一度初手から仕直^{シテ}そふ、^ア早ふ立ちやいのふ、^アそんならあとを致しませう、

タベお前が行衛なふお成なされた其時よりはつと思ふた悲しさとお歸りなされた嬉しさと何やらかやらで持病の癆しづきの間お待なされ、お氣がつきたらお菓子でもまぐくほほしうない構やんなきつふ癆しづきが痛ならぬいたむ灸あをすへてやらふかやモあついがほんぼうしやるかと云ふ顔つくド詠よめ嬉わらひる今の其ふ詞、夫婦と思し召めべこそ、おろかしいお心こころもたんと案あんじて、下さんす思ひ出すもあぢきない、お爺様おとうさまと爺様おとうさまが云約束いさごのない先から、私が心こころも極めた殿お、女冥加めいがみ叶かなふたの玄くつやモ思ふ内早むつび月つき祝言めいげんをして程ほどもなふ健忘けんもうとやら云病びやうひ、神や佛のお力おちからでほ本腹もとへ遊ゆばしても、ほ一門のお出合あいあふ、つまらぬ事をおつちやる度ど、かいとしるやら、悲しいやら、此後迎むかもあなたられ、住すかいもないお身の上思ひやられて悲しむと悔涙くわいなみの折から、奥おく方かた玄くつづく出来る明衡めいこうが一子千賀之助かわのすけりつばみ出立だいだ旅裝束たびしゃくぞく、松島まつしま見るを是これ、直様ただあそお立遊あそばすか、此

頃何かと取紛れど、せのあも玄たしめず、國で兄弟同然の中のよかつた文字摺様、お前がお向へ遊べせば私が爲え大事の姉様、どなた様へもお前からいかぬもく、誰ともへもよきと傳ん源之助殿とも堅固よどいへどうつかり氣の毒を、紛らす松島勝手口、連て見送り出て行、是からおれが一人遊び、鼓も大鼓も爰も有と、習ふた事ハ氣どくよも、鼓取上聲はり上抑、是ハ桓武天皇九代の後胤平の知盛幽靈なり、わしが好の強い伯父様が出てこざつた、面白いく打物業、叶ふまじと、數珠さらくと押もんで跡も出る奇妙院、ウダイいか成天魔神成共祈ふせんす眼付、きよろく目玄て熊川が、何を聞いてか高笑ひ、コリヤおかしい、日比堅い顔してゐる、六條の左近殿が聖護院のお長女郎を嫁み取、ヨリヤ取持と行すれ成まい、先盃ハ三十九度、祝儀も濟で床の内、玄めてからみし藤の森、松の千年と契しを小女郎が聞て惜氣の焼餅一つ參れ兵衛

殿、ま一つ参れ兵衛殿。ア伯父様其餅くたかき、きたな、北野を過て柏野や、
思ひ内野よ有ペこそ、つめつた跡の紫野、後ハ互よ睦言の未來を契る蓮
臺野、小づま引上引玄めて、裾ハひらく平野の宮へ、思ひなんく七野
の社縁を切どり、とふよくじや、わしや何ぼでも放りやせぬ殺して
置て行か玄やんせと、泣つ笑いつ現なくどんとたをれて高廟、奇妙院
一心不亂祈れど印有ざれば源之助ハせいつかし、どんな山伏じや、二
人面白ふ遊ぶのみ、己が邪魔を玄るので、伯父様もつい寐入た、サクと
つとし歸れく、歸るまい、貞田殿の頼よよつて、此病人を本性とする
若輩者の知る事ならず、だまつておろとねめ付る、ライ病人を直すハお醫
者様じやいわいらがそんな事玄たてし、一つも聞事じやない、邪魔よ
成早ふ歸れ、シテ玄やく成すでつちめ、某が術を以て空飛鳥も祈落す、世
事よわからぬ大馬鹿よ云聞すには及ばぬ共、刑部殿の頼より、義綱の

函輪通ひ伽羅の下駄も呪咀のもんを書はかせたる故こそ真心蕩て
 本性なし、まつた是を直さんより懷中したる秘書の一巻、此中より一つの
 良薬、是を呑せば義綱も元の通よたゞ敷成かく万事よ渡る某ちみもふ
 りやうを忘りぞけんは掌をもつて大地を打よりいと安ら、イテイ印を見
 せんとて、又いら高を押もめば源之助は撥追取、今之蛇身を祈る上は
 何の恨か有明のつきがねこそすはく動くぞ祈れたらく、引やでん
 てよ千手のだらゝ不動の玄くのげ、明王の火名んの黒烟を立てぞ祈り
 けり、祈いのられ源五兵衛恐しやみてぐらゝ三十番神ましくてもう
 りやう鬼神へけがらひしや出よくと責給ふぞや、アラ腹立やくるしや
 と、奇妙院が首筋摑み座敷へどふと投付て、おしい重なる肥満のからが
 大山をおふたるごとくゆびをかゝめん様もなく苦しむ内よ、聲高く
 繾てもく、此上風の雲よ乘て、龍女は南方よ飛去行べ、龍神へ猿澤の

泄の青波蹴立てくてめつたむせうよ踏付られ目口をはつて奇妙院
其儘息の絶えけり。是かられが居間、其山伏を人形よして遊ば
ふでい有まいかと云内よりも死骸をさし上中のくの小法師になせ
背がひくひどまつかう高いりく氣の抜たのと氣違と誰も心も奥の
間の襖押明入えけり斯と様子も白書院入來る渡會殿に大儀千万シテ彼一
ひて座敷へ直れば夫と案内よ貝田勘解由、渡會殿に大儀千万シテ彼一
と品は調ひましたかな、アいかよもく委細篤と此道益老よ相頼、事成
就の後よは新地千石證人此銀兵衛則證文も渡置、ナニ道益老最前に頼
テた通り調合の彼毒藥勘解由殿へ渡じ有と差圖よ道益近く摺寄ふ
頼の彼毒藥は我等か家よ傳ひる秘法醫の道ハ仁術よて人の命をたつ
事ハ醫家よいかたき禁なれ共國の爲との事故調合致せ共先何人
よ此藥役用なさるしや承て上の事と密る顏色、尤の尋國の爲め家の

爲其毒藥を用るハ若殿鶴喜代君、どハ又何故、錦戸刑部殿ニ此家國
を抑領させ我も諸共ニ國郡の主と成、榮耀榮花をせん計略スリヤ銘々が國
の爲さ、ナニ鶴喜代君ニ毒藥どハ國を亂さん國賊共長袖なれ共忠義ハ
忘れぬ大場道益、知行ニはだされ非義非道ニ組せんや穢らヒシキ奴原
と暫時も同席勿体なやと、立上るを、銀兵衛が立ふさがつてどこへ
く、モ大事を聞せ歸さふやと、留てもいつかな一てん老人貝田が拔打
後げさ、すぐ又どゞめの一ゑぐり、時代ニ合ぬ忠義立、譬得心した迎も
打放さでハ後日の難と懷中さがし取出す包^{ヨヒサ}銀兵衛、此一包は貴殿ニ
渡す、兼てしめし合せし通、ナシ早く、ハア委細承知仕る、追付吉左右お知
らせと館をさしてかけり行跡ニ勘解由ハ血押拭ひ死骸片手ニ蹴上る
疊^{タカハ}さあらぬ躰ニかたへ成、だいすの釜へ打込毒薬元のどくニ蓋取繕^{フタドリツク}
ひ、ナニ松島夫ニお居やるか、松島くと呼聲^ム、あいと返事も合の間の襖

押明手を突け、嫁そちや先程もそこより居るか、何ぞ様子を聞いたか見た
か、何とも、知らぬじや迄ナニ松島、今朝も何かも用事しげくほつと
りとたいくつした幸の釜のたぎりそちが手まへで薄茶一ぶく、立てく
りやれと底意有、舅の詞松島が立寄振の紅ひの、あけをうばふや紫の、ふ
くさうべきも玄ほらしく立る茶せんのあはよりも先へきへ行命とい
心も付ず氣も付ず行儀たゞ敷差出す、茶碗取上貝田勘解由とくと詠、
色も變せすちつ共怪しき躰もなきり、奇妙の秘法、嬉しや此毒薬を
膳部又加へすしめなば鶴喜代は即時よ落命、心地よやと高笑ひ聞
て恂り松島が心の千々よ浮島や水よたゞよふ思ひなり、松島源もの
事よ此薄茶、其方そこよて獨ふくせい、驚く事へない、其方が父伊
達明衡は義綱の一族、忠義立する老ぼれめ、鶴喜代を毒害しても刑部殿
へ國の政道仰付られなき内よ、事露顯せば大望の妨現在明衡が娘の其

方やも生いて置おいて夜が寐ねられぬ様子聞きふが聞きまいがどふで助たすけそちが命いのち其毒藥くどくやくを心見むかて死で見せるが舅じいとへ孝行さうぎょう呑のめぐらへと舅じいとの詞こと思おもひがけなき松島まつしまへ暫ときし十方じはうよ呉くれけるが漸よるよると顔おほを上あ明衡めいこうが娘むすめの私わたくし若君様わかみゆうじやうの毒害くどくがいをどう様ようへ洩あらわそふかど思召おもひめしてのふ疑うなづひ無理むりどうさらく存こじませねど姫ひめの身み生うれてより三界さんかい又家いえなしとやら夫めを神共佛共しんごくぶつぐん大事だいじとするが世よの敵ぞへ其夫めの父上様ちあ眞實まことほんの爺とう様ようへ大切だいちやく思おもふ物ものたどへどふした事ことよもせよお身みの也難またた成事せいじを何なんの人にひと洩あらわそふを未練みれんよ命いのちおしる共見おも見ぢん思おもひれせぬけれど心こころよ掛かるへ我夫わがめの懲うなづかしるふ心故ゆゑ女夫めといふ名計なまけついよ一度いちどの添そ寐ねさへ馴染なじみ程てい猶よぐりんせない氣きよも私わたくしを女房めいぼうざやど思おもふてござるがおいとしる離はなれともない死死ともないなんなんくの誓文ちゑもんで人ひとよう云いぬやませぬ命いのちを助たすけ給たまりれどくといつ泣なつ伏ふふがみ伏ふ拜あがむ手てよ露あわ重うつとふ涙なみだの瀧津たきつ浪なみ岩いわよせかる

風情なり、かゝる所へ渡會銀兵衛色真青々欠來れべ、勘解由きつと見、
合点の行かぬ貴殿の顔色、首尾よく毒害仕ふふせしか、心許なし何と
く、さればく、直様館へ馳付膳番み示し合膳部又残らず毒を入、サア仕
濟せしと思ふ所、イヤモッよい事又ハ寸善尺麿、若殿のは手遊枝珊瑚珠の
鉢植が、みぢん々割し心得すと乳母政岡あやしめバ、カ强有力者の節之
助正敷毒々偽いなし其頼人を白狀せよと膳番川崎軍八が首筋攔んで
手詰の場所、流石老功の刑部殿せきよせいたる風情みて、軍八を眞二つ
傍より並ぶ近習小姓妙茶道み至る迄、十人計即座み手討、白狀すべき手
筋も切只今評議眞最中、いかゞ計ひナさんやと、青息といきうつたふれ
ば、さしもの貝田も溜息つき、十が九つ仕ふせしよ殘念く、去なが
らすばやき刑部の計ひみて、詮議の根をたつたるい遁の勵志かし政岡
松が枝など鶴喜代が傍を離れねば、事をはかるよ便なし、其毒薬を

見出せしり、外々逆意の者有ると思へせんはからいなりと、返つて彼等
又難題を云かけ、遠ざける謀計の刑部と兩人はからいれよ、暫時も猶豫
成がたし、早くくゝと渡會へ、又引かへしけり行嫁同ヨコヤ松島、斯仕おふ
せねば猶の事彌命の助られぬ、覺悟して早く呑、アイサア呑、アイくらひぬか死
女郎ザアくくと追廻され、悲しさつらさ一世の瀬戸際セトヒ襖々はらりと源之助
拔手ハサハタも見せず松島が、肩先すつぱと切下る、ウシと計よかつばと伏血刀逆
手ハサハタと取直しきつと突込弓手のあべら日比ヒタチと替るとつばの覺悟強氣の
勘定由ハツヅキも悔り仰天手負ハシカい苦しき顔振上ハサカ、日比愚鈍の私ハシカが、かしる有様父
上の口不審ハシカい尤、錦戸殿と玄めし合せ、勿体なくも主君を失ひ、國を奪
ぞやの大病を是幸ハシカと作りあほう、現なき身の行作ハシカも、主人をかすめる冥
罰ハシカの伴ハシカよ忽報ハシカひしと先非ハシカを悔て本心よお成なざるし事もやと心を付

れど此頃ハ彌莫^{アリ}る惡事の企父は子の爲^ス隱^ヒし子ハ父の爲^ス廳^スと古語^ス引かへ親と子の心^スく^ム隱^ヒあふ不忠不義の心^ス諫言^{セん}せん^スも情^スなや明衡^{アキラ}が娘松嶋^{マツシマ}某^カが妻^トすれ^バ女^ス引^サれ大望^{タラカウ}の妨^ガなすかと思さんかと不便^スながらも此^ゴとく手^ス掛^タるは女房^の縁^ス迷^ハぬ心^のけつばく仕込^ス仕込^シ金^{ヒギテ}思^フ圖^フのはづれ^シ天道誠^{モニヒ}を照^シ給^フ是^前の印^ぞや近^キ手^本舟岡^{アシカウ}にて鳥^ス取^ルと眼前^の欲^ス迷^ヒて山深く^ス難^ミ逢^{アハ}たるまつ其^ごとく國郡^{コトウ}の欲^スふけり我身^を忘^メ深入^シ終^ムハ身^を亡^シ給^ハん淺^{アハカ}問^シや父の惡事^の根本^ハ私^と云^子故^の闇^{アハカ}其^迷ひの根葉^ハをたつ我生^害は先祖代^ミ傳^タる貝田^の家の苗字^ハけ^ガさじ物^ト一心^ス思^ヒ込^タる孝^の道[、]心^の迷^ヒをふつゝと切[、]惡事^を惡^ヒ留^ツてたべと孝^と忠義^と二つ三つ^よはり行身^の松嶋^が扱^ハそふしたお心^かそふとい知^ラず今迄^モハ病氣^故の現事^トふぞ本腹有様^ト烏^{カク}の泣^ハ日^ハ有

ど泣て祈らぬ神様や佛様迄は苦勞をかけぬ願ひもなかりしよ、今の立派なお詞を悦ぶ甲斐も情ない。此お姿は何事ぞ、此世の縁は薄く共、未來へやつぱり夫婦ぞやと、痛手もいとへず縋り付いたはる息も絶ぐ。又頼、少なき其風情、強氣不敵の貝田勘解由(調)、ハ波ざいたり不孝者子が死ふが親が死ふが思ひ込だる此大望、いつかなくひるがへさぬ、親又逆らふ天罰(調)、くてくたばるハ不孝の罰、思ひの儘、又苦痛をひろげと、二人をはつたと踏飛し見返りもせず入よける、様子とつくと物影(かげ)ぬつと出たる源五兵衛(調)、貝田が胸中合點行す事を謀らん其爲、狂氣の躰、又何も角も聞抜たれべ道れぬ勘解由、テ一撃(つか)と欠行勢ひ、よく待た源五兵衛殿と苦しき骸取縋り、忠義よこつたる貴殿とは、知たる故、法印が工の次第あど打て、白狀させしも我父の百分が一の罪亡し、我も少しの忠義ぞや、主(同)みそむく父勘解由果ハ刃の鏽くすと成給へんとい思へ共、眼前

親の憂目をば、何と見て居られふぞ相果る共魂なまこ、四十九日が其間。此土を去ぬと聞なれば、死しても見ゆる我悲しみ、せめて暫しばしが内成共父の命を延ほてたべし。今いまの際の願ぞや、手を合す源五殿お情お慈悲と身を投伏とうがく歎あきらめバ共ともみ松島が、合す兩手も弱よほくと今を限りの二人が歟、孝心貞女の節義せきぎよりさしも又荒き熊川も、目を玄くろべたゞき居たりしが僥惡邪智の貝田が船ふね又斯またも忠孝揃そろはひたる避けなげの若者わがわよな、親おやの子故こよ又迷まよひもせで子この親故おやこ又迷まよひしよな歎あわせしがたき勘解由かげゆなれ共汝おなむが孝心厚きよめんじけふの様子さま何事なんごも知らず覺おぼへぬ氣違きがたひの目又またこぼさぬ一束いっそく有難涙さうるい未まつ期ごの水、引取息ひきとりも一時ひととき又哀あわせはかなき最さい期ごなり、ほろりとこぼす勇者の涙、玄くろほる熊川庭先にわへ、貝田が下知げしよて數多の家來けらばら／＼と追取卷アマ贋にせ氣きちがひの源五兵衛のぶ遁のなやらじと呼よへつたり、常つねの力ぢから又百倍ばくばい増氣ます違たがひ力ぢからの源五兵衛のぶならば手柄てがら又留とどて見みよと、庭

へひらりと右左捕たと掛るを引寄せくばらりくと人礫、強力手練の衝きよ、ヨリ叶ひぬと皆ちりど、思ひがけなき後ろ頭目當よ打付る釜のねつとう毒氣よむせび思はず尻居よどつかと伏透へ切込貝田か刀請たる強力手水鉢、微塵よなさんと振上る流石の貝田氣を呑れ逃入跡へ又むらく、出合ふ太勢打付る石よ打れて人の鮓、我身もどうとふしくよ染込毒氣よ眼もくらみ勇氣も碎け無念の歯がみ、口惜や殘念ややみくよ毒藥よ命を果すかきつくいや此上の何千萬日本國が寄くる共死物狂ひのあられ死敵の屋敷よ我かげねいつかな残さぬ人座の有ん限りと氣をかため踏出す足もたぢくくよひる兩足踏しめくよさしゆる奴原はり退蹴殺し踏殺し、人なき原を行如く、万夫不當のさうけつも運盡の輪や熊川が武勇の程こそゆくしけれ

姫氏國と書し寶誌こそ四百餘州の粹ならん、何國へ有ど取分て、都の水
でみがき上娘盛の品者が前垂たすき、かけまくも髪形さへ手品さへ、和
らかそふな豆腐やの内を手傳ふ小息子が、水のたるのを焼立る、おかべ
一重の隣より、何する人と白浪か志らどり見へぬ男なり、され共此人畫
をば何と鳥羽玉の、夜ならで目さめ給ひぬれ、いと不審多き、すぎわいな
り、中間共侍共、わからぬ腰付せひつ合羽、あたりうそく立留り、浮世
渡平の此宅な在宿ならばに意得たし、誰志ややかましる用が有なら
あしたござれど、夕べのきりを取み來たのか晚より是非共行程又其時
よ一所よ濟す、やく左様の用事でなし、自他共よに意得たし、是非逢ふ氣
かそんなら其戸をぐつと押たゞ、ごく志づかみ志やうぞこぼれ物が何ん
すぞや、アヤこそ志ゆびん引くりかへした鹿相な人と、ぬつと出す顔へお
か志う惡光素人の焼た樂焼の中よぎら付目をすりく、門兵衛様拵す

さまぞいふりでござります、そして、何ぞ用でもござりますか、まげ密くの用事も有べ、内へ這入て其様子よく、内へ雨が唯ぬけ外の方がましでござんす、然ば是でや付ん、主人錦戸刑部殿其方へお頼なされたき、餘の義でもない隣の豆腐屋ひつぢやう、傾城高尾が親里なれば、冠者太郎諸共たうねきた尋來らんひつちやう、必定其時より折ひそを覗ひ人知ず二人共よ差殺さしころし捨すてられよ、此義首尾よふ仕あせなば某が吹舉すいきよして侍、又取立る箇様かじよの事をや付るも、先日屏敷びやうで博はくの節、二三度の出會あいえ汝が魂見たましひぬきし故一重ひとじゆよ奉公はげまれよ、畏りました、スリヤ隣の豆腐屋ひつぢやう、高尾たかおが親里おとこ若わざわも尋てこまい物でもなし、來た時より、ハテ氣遣きやりひさんすな、びんぼゆるぎもさせませぬ、ハテ拟小氣味のよい男、然らば隨分手まなかりなふ、万端貴殿ばんたんを頼入まわ、近日ゆる、ハテ意得いとくんだ、詞あづれ、適万石取ふく、腰こしよ二腰ふたこしさしこなす、銀摺ぎんざくらへもうさんなる、なまりちらして歸りけり、よふお出なされた、コレ屋敷やしきよいのが

出来たら必知らして貰ひましよぞへ、沙汰なしよぞへ、
あいつも錢なしぞや、ちつとまけると小言計ことあざ、あつたら夢を覺され
た、ま一寐入見玄らそと、入より早く高齧着たかねびきのみ着の儘氣さんじなり、
ナ重三様大分仕事のはかいいた、ちつと休んで下さんせまくお講なさ
れますな、女氣のない私が内、湯玄やの茶じやのと親子共、毎度お世話又
成まする、ヨリ其お禮でござります、七兵衛殿は病氣で宿へ下つていられ
るげな其間は、遠慮なふお遣ひなされて下さりませ、まだよつ程此豆
腐手ついで、皆片付ませう、そんならそふして下さんせ、私も車をさい
て仕舞しを、ナ重三様、からしてお前とかうならんで此様みせい出すも
世帶せだいのけいこして見るど、ほんよ嬉うれしうござんする、始て見み初はじた其時とき、
いどしらしいと思ふたが、癢しゃくを覺た始はじみて、まいらぬ筆ふでの跡あとや先譯さきわけのな
いのが縁縁のはし、夜よすが求めて寐てそして、寐る度毎ごと可愛かわいさの十寸鏡さかよみ

取其隙も、寐た間も忘れた事はない。ふと豆腐を其様よ振廻すと、私が身内に真白より人の白あへが出来まする。嬉しくお志ちつ共仇みに存ませぬ。元私のちいさい時、餘所へ養子よ参ましたが先が皆死果て、此比親仁を尋て参り、一月餘り京都の住居近所よ馴染と云はなし、南無三豆腐を真黒ました。玄んみといふの親仁計、存の通のあゝ云氣性やうお幾様へ此上ながらお頼ります、あれまだあんなかたくろしい、他人の様な事計ふ前の心よかけどが有、かけども何よもござりませぬ、ほんよかれゆふござります、其ござりますがわたしやいや、そんなら可愛女房共、私が心は此焼豆腐、たゞへ火の中水の底、そりやほんぐでござんすか幸酒も爰々有改て内祝言、必虛を言玄やんすな、何の虚を誰がいを、そんならほんまよこちの人、女房共、嬉しやと抱付、玄めからみたる若藤や、若紫の若女夫面白盛花盛、晝日中此様よ、引ついても居られまい、お袋様

は今朝から南禪寺の方丈様へ、雨もどふやらみそふな幸豆腐も出来て有^四お向ひがてらいてかふとあぢ世話をべ焼豆腐^提ていそく出で行[。]日影[。]つらく忍[。]身は薄[。]おぢと管の蓑[。]みかさとやせみさららゐ賤[。]の姿[。]ゑよんぼりと高尾を先[。]綱はとある小影[。]立休らひ[。]高尾冠者太郎義綱共云る身が鳥おどしの様な形[。]ゑてそなたとかふして道行[。]此比でない大當[。]今日の趣向[。]を皆[。]見せたい呼でこい[。]ティヤヤ殿様[。]爰[。]が私が内[。]サアくお入遊[。]ばしませ又此郷助殿[。]に何してぞと云つし寄て蓑笠[。]をぬがせやせペ義綱公[。]すつと通つてたそいぬか[。]爰[。]へ來て足洗[。]へついと忘てみぬ世話事[。]で今日[。]ハ大分草馴[。]たゞ早ふも夢現[。]恂り忘ながら娘のお幾手鹽[。]み汲豆腐[。]の湯[。]お足[。]みさ[。]れる痴らかな手先[。]みふつと[。]むさい内[。]似合ぬきれいな娘[。]一夜の情[。]をかけくりやう悦べく[。]今の褒美[。]何[。]をがな[。]幸[。]今迄はいたゞ其下駄[。]

あたしよりの有のを遣へすぞ、是が妹育のかための印後日よいやと云
 さぬ様え、太鼓共が常よいふ下駄を玄つかり預だぞ。誰か有案内せい
 ど、上座へ直るも千鳥足、門も高尾コレ姉、久しふりの姉が顔、見忘れり玄
 やらぬか、何のア忘カナれませう、姉様よふ来て下さんじた、此間からお前の
 嘴カバ、とやかふ聞て案じたが、お前の事を云出すと嘴様の不機嫌カキゲンどこよ
 どふしていや玄やんすぞと案じぬ日ハござんせぬ、嘴様カキさつきよか
 ら、南禪寺の方丈様へ、るかしやんして留主なれば、お戻カモり次第よいよふ
 よ私がいをふ必あんじさ志やんすなへテ、よふ云てたもつた曲輪カツカへい
 て逢ぬ中ヲ、おとなしうなりやつたの、夫なら嘴様カキお留主かや、
 此ふ方ハ大事の身跡からお供もくる程え、ちつとの間成と奥の間で、
 ほ休足ハしまシマしたいと、どふやらカタハ譯アカルテも有脉アリマツを見て取ふ幾ハ手をつかへ
 見苦アガラしけれど奥の間へ、ひ入と進められまシいかふくサア高尾もお玄

やと打連て、一間の内へ入給ふ、跡よおくれて稻妻がいきせき、尋ねる黃昏時、南禪寺の門前へ爰かと人よ豆腐屋の門をこそ爰行迷ふ、戻りかしりし主のふ澤アキナサ卒爾ながら物問ませうと、見合す顔、お前の神涙山左衛門様でいござりませぬか、ヤコな様のふ澤様ア久しぶりでふ達者な顔、お前もほ無事でお嬉しや、マコちへと我家の内、山左衛門叹あへず、ナニお澤殿、思ひ出せば十六年以前、若氣の至りと女よ馴染、因果と懷胎、生れ落すと女ハ相果、いか様ナ若いお人の玄はたらと、乳呑子かしへうろく、さつ玄やる氣の毒さ、玄かも辰の年辰の月辰の日辰の刻のほんよ珍らしい誕生、幸こちよ乳も有、妬と一所よ呑す内、斷もなふお前ハ家出、めつそふな人玄やなと思ふたが、死だ佛の云玄やるより、餘所の子を世話するも、一方ならぬ他生の縁必罷未よ召るなど、夫婦して育てる内、其愛らしさ可愛らしさ、いつ共なしうこちの娘、成程其節我等族よ

り歸りお尋ねせど行衛知れず、不思議な事で今日といふ今日、廻り合た
も古主の恩^{シテ}其娘の何と致したな。アおなか一つ痛ませず疱瘡癰疹^{はうとうはじか}
もかるふ仕廻ひ、自慢^ビ玄やないが此かいわいよ、ま一人とないよい娘^{マジテ}
ふ前^ヒい何故^ミよ、キ拙者^{サツシヤ}只今仕官の身、稻妻郷助と名を改め、お主の供し
て此邊^{アタリ}又、傾城高尾の親里^{おやごと}尋、何とおつしやります傾城高尾の親里を尋
てか^{カニモ}其高尾と云い、わしが娘のふ種^{たね}じやいいの、キそふと^ハ知らい
では^ハ志^シたり、コレ^ハ志^シたり、コレ^ハ志^シたりと絶^たて久しき名乘合^{あひのりあひ}、といつと^ハれつ
浮事^{ハシ}のつもる數々^{かず}嘲合^{トコシ}様子聞^ハる娘のふ幾^{ハシ}、扱^ハほんまの爺様^{ハシ}か、おな
つかしやと取縋^{ハシ}る別程^{ハシ}へし親子の名乘流石^{ハシ}強氣^{ハシ}の郷助も、志^シん^{ハシ}泣寄^{ハシ}
目^{ハシ}涙^{ハシ}大づけなふて哀^{アハレ}なり、母の聲^{ハシ}ぞと聞^ハくも高尾の奥^{ハシ}走出^{ハシ}、おなつ
かしや嘆^{ハシ}様^{ハシ}苦界^{ハシ}の身の悲しさ^{ハシ}、長の年月^{ハシ}音信^{ハシ}せず、よふままでゐて下
さん志^シだ、殿様^{ハシ}のお世話^{ハシ}みて曲輪^{ハシ}を出し程^{ハシ}もなふ、身^{ハシ}みせまる浮離義^{ハシ}

暫しの内の事不自由と大事の殿様お供してお前を目當めうよ、そんなら何と云殿様のお供して、アサつきよから奥の間まよと聞て心も落付郷助何思ひけん母親おやぢ、高尾が手を取門の口突出つっだして戸をびつぢやり、そなたに爰あひ置事ならぬ、どつちへ成共勝手かうて行と、詞こと又拘りこゝ、そりや又なせでござんするくく、縱たゞひどふ云事有共殿様の傍放そばはなれ、脇わきへ迫せし行事いや、悪い事が有ならば堪忍かんにんして下さんせく、ニシ嘆かみ様、詫言わびことえてたも殊ことと、おろく、涙なみだぞ道理ごとなり、妹わい構かまふな神涙様かみなみださまもお構かまひなされなさ高尾科たかおの其身おのよ覺おぼ有はづ筈はず、東國とうくよて誰だれ有はづふ肩かたをならぶる人ひともなき冠者太郎義綱ぎのう公ひきの膝ひざに入る所ところもなふ、見苦みくるしいあがらやへお入いりなさるる誰だれ故ゆゑぢや、今こそそれ此身なれ共とも古いきしゑゑの高橋幸内こうばしゆうない教俊きょうしゅんとて、秀衡しゆこう公ひの扶持人ふじにん、いかよ流浪りようろう亥いたれば迎むか現在ざいせんの己故ごお家いえを亂まし殿様てんさまよ、は惡名あくめい付つけさせてさ過すぎされた幸内殿こうばし、先祖せんそへ對たいし云譯わけなし、は家中うち廣ひろき其中うちよ忠臣ちゆんの武士士有あべ、

己を殺して惡道の根をたつ人の有もやせんと、母が覺悟かくごへし爰いと佛ぼ檀だんを取出す位牌いはい、俗名高尾たかおと印せしりげふい娘が殺さるゝか明日あしたの死骸がいを送おくるかと、我子の死しるを待兼まつまつるも、古主のお家が大切たいせつさ、夫おの世で臣お主君へ心計こころのや譯わけ、片時かたどきも殿様とのさまとは一所ひとよ置事おきことならぬ、うろたへて爰らいそら又居ゐべ、七生迄しちじゆごの勘當かんとう亥いやぞ、ササく皆様奥おくへへと、母の詞ことの利きの當然押おさて留とどん様もなく、跡あと又心こころの残のこれ共とも、是非なく奥おくへ入いみけり、外ほか又亥いよんぼり、枯紅葉かくれ、思おもひ高尾たかおが兎とやかうと、思案おもねえ思案定おもねまらずまらず、道欲どうよく亥いわいな、ア嘆たん様、殿様とのさまをお主お主とい私わたしもよふ知してゐる、蓬染あひあらわてから二三度さんどの後異見いがんも玄あらわたけれど、つい其内うち又いと玄あらわう成な、一日いちにちお顔おほおを見みぬ時の私わたしの人の心こころもなふ、お主お主も家來けらゐも打忘うちわすれ、夜よ毎まいくく又添そそぶしのあかぬ別わかれの曉あかつき、又いのふと有あを引ひとめて、つい夫おなりよ、居續つづが、こうじくしておん身みの仇むか、皆みなから的事ことなれば、いつそ身みを投死とうしふゝも、おなかよやどした

此やしは私が子ならお主様死るよも死なれぬ身とふぞ夫迄堪忍して
お傍^{そば}又置て下さんせやいのくと戸をたしきもだへこがれて泣居た
り内はひつそと志づまりていらへなければ涙をとゞめ^開、そふ玄や何
事も皆先世のごうと傍見廻しひろゐ取小石を入るゝ袖袂^{たもと}欠出さんと
する後^{こう}へぬつと出たる浮世渡平、片手^{ひとて}と高尾^{たかお}を轡攔^{わじつかふ}我家の内へほふり
込^{いれ}其身も共^{とも}入相時^{あひとき}蚊^かの泣音^{きゆゑ}さへほそトと近所もれくる夜なべ歌
君と逢夜^{あふ}のさはりハ月夜^{つきよ}月も忍ぶか笠をめす月も忍ぶか笠をめす^開
只今夫へ参ります私^{わたくし}と内證^{うちしき}又用事を仕廻ふと直様^{ただよう}夫へお袋^{ふくろ}の云
るゝ一分始終尤^尤矣やが若い女中を只一人外^{ほか}と置のハあぶない物、高尾
様^{さま}。アコヤもふ爰^{あひ}又人氣^{ひとけ}ハない^ハ氣遣ひなくといふて奥^{おく}
ハ女ばかり、此家を明て出られもせず、どふ玄た物で有ふな、アいか様世界
はあじな物、殿^殿のお傍^{そば}又付添^{そば}て片時^{かたどき}放れぬあの高尾^{たかお}、義理詰^{ぎりづめ}成たれ

べ別れねばならぬ乞、又十六年前又別れた娘、縁有べこそ廻り合切て
も切ぬ血筋の縁、和泉の小治郎定倉殿某へ密かの書、此度ちふの重
思公よりは狀到來其趣ハ殿の身持上聞よ達し、は覺へ宜からず去共
先祖の戰功に感じ思召、義綱が放擣の元ハ領城高尾故、此女の道を打一
家中の心をかため、義綱を補佐すべし、大將の前ハ重忠宜歎はからは
んとの内意、其方ハ人知ず、高尾を打てくれよとの事、おのれやれお家
の爲と請合しが長の年月我娘を世話よしてくれたお澤殿、其大恩の有
人の眞實の娘の高尾、どふマ是が殺されう、といふて助置時は定倉殿の
詞も無足、何とした物で有ふ、我娘のアホ幾幸年も似合頃、高尾殿の
身がハリス、そふ玄や、と立上り、思へバ、因果な娘、生れた年は
母よ放れ、久しうりで廻り逢爺親が殺すとは、いか成業か報かど、人目な
ければどふと伏聲を立すの忍泣表、又人音一寸遁れせて暫しの命な

とかほふへ恩愛合の間の襖引立入よけり我家の内よりそつと出る渡
平の跡のかけがね忘め傍見廻し隣の内入る早ふ高笑ひハコツモツお天氣
でござります、盼へこなたよりおりませぬか、お袋様カバンかんきんかカミなむ
まみだ佛南無阿彌陀佛バツヨウ皆お留主かへカヘ、そしてお客でも有たか
して盃カクや鉢子鍋カベ、何かな、コリヤ私ワタシも呑めと云事モノやな、是コレに駆走カツヂで座カマ
ます、エ着カガより及びませぬ、エ何ナニや田樂タノガを拵アツマへてくへカイくカマふござ
ります、そんなら此間鍋カマも爰カマへ乗せスル、コリヤ火ヒがゆるい炭カミを一ぱい取てか
うと、餘所の勝手カツテのくクれ玄カミいハコの何國ナカツクニの浦シマでも寡カモの性根我物カモガタいらす、カモう
のふフ一ぱいの炭カミ打明ハラハラて吹付スルる内ナカニぱつちりと、炭カミのはねるよ胸カミりしハコ、
けたいな炭カミ玄カミや、すでよ顔カフを焼ヤムふと忘メムた、おれが顔カフよやけどを忘メムたら玉
子娘カムシマタ又浅カマカシで有カマ、何ナニやむまくさいカマクサいハコ、能衆カモジヨウの吊ハシの匂カミひハシがするど、こ
家カミやのカミ。不思議や今此下駄の名ならぬ匂カミひ、最前使の詞カミと云カミまよ

しく此家又冠者太郎ヨシトと一人うなづき差足し、下駄取上て土打拂ひ、傍アリよ人も内證の、賜た戸棚を幸とそつと這入て内から戸を仕濟し、顔又忍び入、かくどいざや白張シラハラの、行燈提て娘のふ幾スカツ、裙スカートもはらゝ立出て、此マテ重三様シテ何してぞ。人の思ふ様ムカシよもない早ふ戻つてくれたがよいと、日よいく度か取上る、合せ鏡も引わくる、母ハ奥アヒ立出て、お幾スカツや、又髪をゆい直スルやつたか、身だしなみをきつらスルやるのほんよそなた云たい事マテく、爰ホトトギスへ一寸お幾スカツや。今迄ソノヨリ違ふぞや、實の爺ハタチの手前も有、あの様モダニ育カブたかと思ハシメるしも恥オガしい、といふハシメ重三殿とそなたの中、有まい事ハシメなけれ共、心の知ハシメア渡平殿、其息子の重三との縁組ハシメ、どふもつまらぬ物ハシメやぞや、若い時の、一盛ハシメ面白い程ハシメあきも早いミハシメわしが悪い事ハシメ云ハシメ、一旦ハシメのいて仕舞、未ハシメどふ共なるぞいのと母の異見ハシメ開悲ハシメしさ、皆尤ハシメなは事なれど重三様と私が中、春來迄ハシメもと云かハシメし、

必退な退まいと、雛様迄を誓紙又入かたい約束今更々退れふ物か。嗚
様、是計へ堪忍してどふぞ添して下さんせと娘心の跡や先つまらぬ様
でも義理の義理立通す氣ぞ道理なる奥を出る神浪は母を押退お幾が
胸ぐら取て引すへ。爰な恩知らずのめらうめ最前も始終の様子へ皆聞
た大恩請たお袋の事を分たる今の異見よふ口答ひろいだな。コレお袋
此娘よさつぱりと勘當をして仕廻つ迄やれ實の親の折檻へどの様な
物玄やうぬ見おれど娘を引立てる門口へ。コレ待た山左工門殿血を分た
高尾が身替り義理有娘を殺さして。此母が世間へどふも濟ぬ。何と
かく程ゆくしい騒動よさしむな者の命をかばい似首の事のあらはれた
ら義綱公の身の上高尾を殺して其首を定倉殿のお目又掛一家中の
ほぞを堅め義綱公を代え出さず。忠有者と云はばれまいぞや尤も
なれ共、こなたの娘と云殊み腹より主人のお種共高尾を殺す時の主殺

しの惡名遁れず。ヨリヤ娘、そちが命を捨てばな、親の主君へ忠義と成義綱公のほ身も納る、養親の爲みも古主、ヨリヤ聞譯て命をくれい、とは云物の其方も、たまく逢て悦びし其日もさらす手みかけるも、先生からの定り事、親子のゑんもつき果ていつそ合すみ仕廻ふたら、殺す心も有まいよなま中よ縁つきず、廻り合ふと殺さるゝに、因果の道理とあきらめて、これらへてくれよと聲を上わつと計え、泣居たる娘の始終聞とも、父が前よ手をつかへ勿体ない其悔、お主のお役立といし、姉様のお身替りねがふてもなき身の果報去ながら一つのお願ひどふぞ聞て下さんせ、早ふいへく、ア、其お願ひと言のへな、身替りと成事を、暫く延て下さんせ、其内よハ隣様のおひへも仕立て仕廻たし、七觀音の其間、清水様へも參りたし、ア、一月も、四五年も、立ての上のお身替りと、何を言ふやらわけもし、ア、そりや己何を言のじや、最前様と、事を譯て言聞すみ、ヨリヤ命が

惜いの玄やな、未練者め、ひきやう者と、刀すらりと振上る娘のわつと
飛退て、レお嬢様、レ爺様が私を切とひな、ア切れぬ様と詫言をして
下さんせと、聲もしどろみふるひ居る、氣遣しやんな殺さしやせぬヨレ
神浪殿カ可愛そふよアお幾ハの年端ヒシの行ぬ心ハシもなさぬ中の義理立て、
色くアえ氣ハシを付てくれる物、夫を知つて親の身で、繼子玄や故ヨリ殺さし
たとシふ夫ハシが見てゐられふぞ、何ぼうでも身替りハシ、殺さぬハシと、義
理ハシとかこ付有様は、可愛さ餘る母の慈悲ヒビ、ノ嬢様嬉しうござんする、お前の
影ハシで助つた、つれない爺様のふこわやと、ハシ行帶際引戻しハシ、情ない根性
じやな、コリヤ科ハシ有て殺すなら我が替りハシ此骸ハシ一分だめしよ刻まれて
も、見殺しハシする物か、親ハシ百倍惜ハシけれど、殺さよやならぬ人界の義理
と恩とハシ責ハシられし、おれが心を推量ハシせよ、いつ迄云ても證なき事、覺悟せ
よと振上る、母はちつ共身を惜ハシまハシ、レ神浪殿カ必りやうじせまいぞあ

バテ 扱お袋わら悪い了簡迎りやうかんむかげも助ぬ彼かれが命みことかべい立してけがせまいぞと云り
 りくレと付廻すアレ堪忍たんにんして下さんせ嘆様のづ退て下さんすな、氣遣ひ仕
 やんな切玄きしんやせぬと母めは我子わがこのふしるふしるみ成殺さすまいとかばふ親おやぢ
 義ぎの爲ためよ殺す親思おもおもひは二つ三つまたまつ水越計こす浮涙うきるみだ涙なみだくハ陸奥りくあの船
 も浮めん風情ふぜいなり人ひとよ知られて證あたるなしと思おもひ切ても手てもたりひ始終しゆう
 の様子ようす隣となりから聞居きこる高尾たかおの身みもよもあられず走出でて表おもての戸戸碎つぶけよ破は
 よど打うちたしけば、かけがねはづれ開く戸戸の、どしやかそしと我家わたくしの内うち、南
 無三寶むさんぼうと神浪かみなみがへだつる母めを及びぞし、たぶさ攢つがんで提切ときよ首くびをはつ
 しと打落うちおとす、死骸死骸よ取付母娘めのむわい、前後正体じょうたい泣なぐらむたる心こころぞ、思おもひやられたり、神
 浪かみなみも恩愛おんあいの胸むねよせきくる涙なみだを揮きへ、せめて死顔しそう清めんきよめんと首引寄ひきよて取上
 る、たぶさよ結込ゆびこむ一通いつとう、爺様じいさま參むかる、幾いくつと、聞きる母めの涙なみだながら、ア扱あつい覺悟かくご
 の有たのか、但ただしし何なんぞ望事のぞみ、ア夫め見みせてと取纏あつまる、ア此様このような未練者みれんしゃ死し

だ跡迄耻さらしと引さく手先よ取縋りなふ縊赤練な事有共、是又上こ
すかたみひない私よ讀して下さんせど、高尾が泣なく押開き松の千と
せを盛どし、朝顔の一時を一期とし、何事も前生の定り事とあきらめ
り、わたしが首を討、高尾様の身替りみなされんよし、其場よ成たら
なげきよおくれ、よもや得討なされまじと、態と憶病よ成、比興な最期を
致し、シヤ機嫌を直され只一遍の名からのみ、未來の頼に致しり。
見や玄やんせ神浪殿、是れでも憶病者かいなふ、ひきやう者かいのふ、
出かしたな、そふ云そちが心と知らず、赤練者、ひきやう
者と云たのが、今でハ面目ないわい、娘よこらへてくれい、西も東も覺ぬ時よ
り、十年又餘る其間、なまぬ中のへだてもなふ、可愛がつて下さん玄たは
恩も送らず、先立不孝の程に堪忍なされ下されし、未來の隣様よ逢た

り共やつぱりわたしれお前様を眞實の鷗様と存じ、と、そふ思ふ
 てたるものかいの、と、そこ迄も親子玄や程々氣を懽かく成佛してた
 もやく、取分心よからり、と、高尾様の事頬上り、只一言ナ上
 度事に座ひへ共、爺様の手前恥しく得書残しやさず、よきよほすいものじ
 願ひ上ひ、や事ハ山くなれど心急れひまゝ惜しき筆留りと、讀む内
 父はそぞろなく歎けバ母ハ聲を上、恥しると書いたのは重三殿の事で
 有、此母が呑込である、レ必迷ふてたもんや、思へば可愛やな貧
 しい中でしほたらと何角よ付て苦勞さし、いつ花やかな事もなふ浮身
 の果ハ此様よ親の手よかけ殺すといいか成業か報ひかと、親ノ首よ抱
 き付、抱き付て伏まろべば高尾も共よ泣くずわれ前後正脉歎きしハ理
 り、せめて哀なり、戸棚ぐらりと浮世渡平奥の一間よ冠者太郎添なし
 と欠行をしつかと取てどこへく、義綱公の座有とい何を證據と云

せも果す以前の下駄を取出し火鉢へなぐれば炎と匂ひ四方又薰
しけり、其銘詞は薄紅うすくろひ、日本國中廣しといへど伽羅カラにて作れる下駄は
かんり、義綱ならで何國ひづ又有、小言こゑいはずと、爰放はるはせと裙振スカフ切カツて欠出せ
ば、モウ是迄イハタニと切付る拔つくよりつ死骸シガみて丁てと請うければ血サクラいたしり、流
込ハマたる以前の間鍋かんぱくしてやつたりと引提ひきあげて一間の内へ欠込ハマたり、何國迄
もと欠行ハマを得ら覗カクふ重三郎、走入てさしゆるを、己おのも敵あだの廻まわし者ものくわん
ねんせいと切付る拔合ぬきあして上段下段じょうだんげだん互たが手練てねん打合うちあしが、重三郎は請太
刀おほのも、しどろしどろよ成なてたぢくく、よろめく櫛くしを蹴上けあげられ、どふどまろぶ
をのつかより、胸元押おもてへ只一突ひとつきの其勢そのせいひアく神浪山左衛門、必はやまる
事なけれど、障子しやうじをさつと義綱公、うやまひ守護しゆごする渡平が有様ようりょうさしも
の神浪しんろう悔くやりしあされて詞こともなかりけり、義綱公いにしひは嚴然げんぜんと、僕人くわくじん共ともの計略
よて近頃ちかごろ心亂こころなれ晝夜しゆがいわかつず姪酒ひめしゅみおぼれ、始て心付こころなたる今日、國の爲ため

又汝が娘殺害^{おやぢがい}又及公事、忠義^{ちゆうぎ}とい言ながら娘が最期不便^{さいじ}やと仰^あはつ
と頭を下^下_下、有難^{うな}に仁心、娘を切りしハ某が寸忠^{すんちゆう}恩れながら君の本心
いか成故^なと尋れば、夫こそハ此渡平、貝田^{かいだ}がおこなふ邪術^{じやじゆつ}よて心まと
はせ給ふ我君辰の年月揃ふ女の肝^{かん}の臟^ざの血を取て、熱酒^{ねつしゆ}よ合し、伽羅^{から}
て養^{せん}じ是を差上、彼術を立所^よス蹇事^{くびき}ハ奇妙院^{めういん}が懷中^{くわいちゆう}の一卷^{いっせん}よて我よく
知る此家の娘の血をもつて我君^{みくに}よ奉れば、斯^{この}ごとく本心^{ほんじゆ}よ成給
ふ、最前高尾^{たかお}を手込せしも、あやまちをさせまい爲斯^か身をやつし守護^{しゆご}す
る我ハ、熊川源五兵衛^{ひでかわ}秀景^{ひでかげ}以後^いハ互^{たが}み少合^{さうあ}さん^へ遁^{とう}忠臣^{ちゆうしん}去ながら某稚^{おさな}
砌^{みさき}より、能見知たる熊川氏似ても似付ぬ顏形^{かたち}、是こそハ館^{やかた}よて數多^{あまた}
の組子^{ぐみこ}をさしゆる折柄^{ひそか}、毒^{どく}よ當て此の如くそうごう替るハ一つの方便^{てんび}
傳^{つら}へ聞^きる豫讓^{よじゆう}ハ漆^{うろし}をさして形^{かたち}をかゆる、我ハ夫^{おとこ}よ引かへて、敵^{てき}より
そも々毒藥^{どくやく}は、かへつて殊方^{しょほう}の天のたまもの、殊方顔^{しょほうがほ}して敵の計略^{けりやく}、一^一

よつげ知らさんへ我方すの内又有、嬉しや悦べしと勇立たる有様
の實もゆく歎忠臣なりテ、頼もしとかたぐ、去ながら先祖より傳へる
政宗の刀アシビ紛失するも我誤り、二度代を乞る心ハなし、松ヶ枝節之助を付
置て鶴喜代アシビ世を譲、是クは程近き加茂川カモガワに隣たる砂川サカワに屋敷を建、我
と我身を押込隱居アヒンキウ吉上院尤成ハシメ詞、高尾殿タカオも諸共ハシメ供をさせヤさんが、一
所又置ハシメ諸家中の心揃ハシメ身替ハシメりも詮ハシメなき事又成ハシメ果んハシメ、ナシく船重三郎、
高尾殿タカオを同道ハシメし、近江路オムロへ立ハシメ越ハシメて、眞野の知るべハシメ身を忍ハシメべ、畏ハシメり奉る
玄かし難義は高尾殿タカオ若輩ハシメの某が一所又連ハシメて立ハシメ退ハシメば、高尾が誠ハシメよかたら
いしへ重三郎と流布せんか、よし悪せつも忠義故ハシメ、さしゐな事ハかへり
見ハシメす僕人亡ハシメびて其後ハシメ高尾殿タカオの替り又死せし、お幾ハシメが爲の初發心ハシメ行衛ハシメ
定ハシメ修ハシメ行ハシメの身、夕ベハシメ川カモガワ又浪枕ハシメあしたは土手ハシメ身をこらし名を銅鉄ハシメと
改めて、一字の寺を建立せんハシメ、實頼ハシメもしき志、娘が爲の善ハシメ知識、我は是ハシメ

此首を定倉殿へ持參して、まちく成し一家中のほぞを堅る忠義の門
出、お暇と立出る母へ引留なふ暫しけふいかなる日成ぞや、一人の娘
又生別一人の娘又死別れ跡又残て老の身へ何とかならん浮草の浮
世又秋の紅葉ちる高尾も共よくどくと歸らぬ歎き人々もしほるし
心取直し振切袖や濡る袖包涙の身又餘る義理と恩義と忠義と又別れ
く出て行

○第五

王城の隣又並ぶ上郡は、目出度に代よ近江路や、難川魚渴水又事かゝぬ
國唐崎も、矢橋も比良も、目又付す、錦戸刑部が家來大木戸門兵衛大勢引
連濱邊の砂道家來共參れく、言聞す子細有、ヨリヤ渡平汝も得と聞、主人刑
部殿、大望のひ企ヨリヤ早濟等も知る所、貞田殿の計ひよて冠者太郎義綱も、砂
川の屋敷へ押込隠居、鶴喜代も術を以自滅さするに間なし、時又彼高

尾が事、定倉が計ひよて首討せしと風聞有共、其沙汰さわざだか成ざる所より三郎と言やつが、高尾を連つれて近江路へ立退のけと間者まんじやが知らせよ某を召され、汝なは是より近江路へ立越、義綱の種たねを懷いだだ高尾、切殺し立歸れ、敵の末は根ねをからすとの仰付、夫故ゆゑよし覺おぼの一腰こしをたまはる。ガヨリヤ主ぬし人のの重實指添成共波の平行安斯かくも以恩おんよ預よみる某、此事屋敷やしきで語らんよも餘り過急かうきゅうの事成故爰迄ひとと一またげ、近江路と聞た計、雲を攔つかむ尋者たずな、いつ迄かしらん程ていも知れず、夫故路金かみふんだくふんだくはへたり、此所迄とくる路みて高尾たかおくさい者ものを見ず、縱高尾たかおよ逢あたり共生物いのうぶつを殺す事某は大不得手おほ夫故汝なを召連つれたり、さく焉やんどい息いきが切きる、皆みなも休めと大道おほよ、主ぬしがす。ハレバ家來共同し座席ざせき見るならびて、大きな池いけやななシテまあ爰との何と云所ところ、ナ是が彼近江八景おうけいの中堅田かただの浮うき島しま堂どうでござります、スリヤ早爰はやとの近江路おうこうな、聞しよまさる風景ふうけいく、堅田かただの浦うらの鉤つり小船こぶね浪なみよもまるし、ヨイとく

也と、古い書物で知たれ共目前見る今が始定めて此湖より鯉や鮒が澤山成ん。うなぎ四五本ほしるな、ア肴として一盃呑だら風景も一入ならん。御其様な肴の澤山時々寄ど八九尺から一丈餘りの鮓が取ます。ハテ扱ふらる物が取れるな、其様な肴の氣味が悪ふて喰れまい、又氣味の悪い事を云なら、此所の川童原、何時共なふ化て出て、老若男女のわからなく彼裏門を念がけます。アシテ其川童の晝でも出るか、日中より出ませぬが、日の暮前からそろくど、是の又ひよんな所へ來合したはい、よくお氣遣ひなされますな、私の爰らの生れ氏子より手ぎしもせず、其川童の親玉おやだま即此浮舟堂様、アリヤ何ど云ふ浮舟堂の氏子がいれバ川童、サ、お川童様の構ひなされぬか、夫でもどうやら氣味が悪い、玄かし日暮迄の間も有ん、ヨリヤ家來共何をうつかり、其方共の此近邊高尾が行衛詮識して、日暮前より早々歸れ、早くコリヤ小人むんづ數なりと見こなして

裏門好みの川童殿この、穴取れてハ叶いそハぬぞ急げくとけんペいひミ主おと山路へ家來共あそ當どもなしよ尋行さが何渡平浮ひら堂どうへ參詣し武運長久祈めぐらん間ま身み續つづて參まいれ

○道行夏野野さらし井

世の浮うきめ、見へぬ山路へいらんより思ふ人こそほだしなれ、ほだしの種たねを身みえ持もつて馴なれぬ旅路たびぢの旅はやき、わらぢ引ひしめくして、登る坂道爪先つまさきの、高尾たかおを連つれて重三郎、都つゝをつとよ置別心わざと跡ひかよ引ひさるゝ牛石うしのいしめてよ行末ゆぎ、何とかならん道草どうそうも泣なてしほれてたゞくとせめて暫しばしに逢あふと見る夢路ゆめぢよ泊とどる宿しゆもがなつもりくし浮事うきごの近江路おうみぢさしてたゞり行人こうじん目堤めづみをふたり連つづ樵きりる童わらびが打むれて若い女夫おとめと悪口あくくも、何の儘まことによと聞捨ききるとき細道ほそみちを分わけつゝ來きつゝ行ゆがてよ在ゐの女夫おとめが打まじり、中なかよほそふ

双連みしよ、一つくすやよく、四季の花すいな水仙室咲の梅いどしか
わひよ撫子の、よれつもつれつ糸櫻垣根卯の花杜若からさほ歌の夫婦
合可愛らしい玄やないかいな。こちのひいきどふたり玄つぱり抱柏返
事菊蝶ひよくぬはせずいたくいん菊四つ紅葉行つ戻りつ香の圖の、
戀よ戀わび瀧登り、篠りんどうの二つ紋、可愛らしい玄やないかいな、ひ
なもかわらぬ妹脊中ア浦山し我辺も勤氣はなれ殿様と、遙夜重る鵠の
橋もとだへて此様よ、つらい別の其上よ、妹辺もむごらしいばかない事
もわたし故、隠かし様も今頃は泣て計りござんしやう世を忍び住命さ
へ浮事つもる身の上よ、又此末いいかならんと、返らぬ事をくどくと
かこち歎くぞ道理なれ、重三郎も諸共よ過し夜すがの事共を思ひつゝ
けて俱涙歩兼てぞ居たりけり、護國寺山内辨才天建立辨天坊あじろ笠
現の麻衣木もめんの白布子てつかう股引りしげよ、建立箱背よおひ

子供こどもはやされて、よそめよそめの二本棒ふたぼう、誠まことの行坊ぎょうぼうつよいぼうりん打うちならし
町まちを大福長者だいふくちやうしゃをさづくる利生りじゆうのそつそ坊ぼう。そそそ、そくさ來かしる
道筋どうすじ見合あわせす顔がほ、ア兩擎りょうせう様さま、ほんほんお前の高尾たかお様さま、袈裟けさ衣きぬから時非じひ時の
と常住じょうじゅお世話せいわ成なました。私が爲ための一旦だんいつ那跡なあとの月から行衛ぎょうえされず、方ほう
尋さぐ出でましたが思ひがけないよい所ところで、是そこから愚僧ぐそうもお供ともする、見れば
大分泣なきた顔がほ、なせうきくくとなされたぬぞ、そそそ夫おとこ覺おぼてござりませ
う、お前様まへさまとよし様よしさまとあじな座敷ざしきへ此坊主はぢぼうず、あたまの様ようまん丸まんまる、挨拶あいさつ
をして床の内うち、イナわたしも云いがより、背中合せなかあわせして寐ねて居ゐても、つい夫おとこなり
よはりよふ、中直なかまっりすりや、明あけの鐘かねよくふてならぬ鳥の聲こゑ、何なんの鳥とりが意おも
地惡ぢごで、泣なきにやなけれどきぬぬの、いなせともない心こころから、レヨれよちつ共離はなぶ
かね、身仕舞部しまいべやへよし様よしさまを引ひずつてゐて其時そのとき、眉まゆも引ひずみかね付つて
よふ似合おなじあたか見ておくれ、こつちへよりなま、嬉うれしと傍そばへ引寄ひき引ひしめて、

ふたりの顔を一面の鏡かがみより寫し見た物を今、夫より引かへて、いつの日
 よあふ事も、しらぬ田舎いなかへしらぬ道、事とふ人も夏の日よ、かわかな袖そで
 の浮涙うきみだからひと思ふて下さんせど、歎く涙の道もせの小川よ、水や増し
 ぬらん、ふたりも俱よ露涙しづるしほるゝ心取直し、必歎給ふなよ頼て後代よ
 なし奉り、ひとつ枕よ逢の手の歌の唱歌さうかも色めきて、あじな縁からつる
 なれ染そめて、すへの約束やくそくかための枕かわらぬちぎりと思ひんせ、夫それ
 がほんかるな、つとめくも、ついなれ染て、寝るよ寝られぬうたしねま
 くら、あいたさ見たさへ皆一つ、夫それがほんかいな、ほんよ浮世うきよの儘
 ならぬでく日も、山の端はよおちこちの落人と人や見とがめん、びきよせ
 紿へと手を取て、急ぐ道筋程みちすぢはざまもなくむれるる鷹かづのつばさへ、頼ん方も
 片だより堅田の浦よど着きみけり

近江路おうみの餘所よその國くにより涼すずしさの、さらなる憂身うみの浮世堂、こなたよ暫し立休たま

らひ や高尾様道筋逆も油斷がならぬ、是から眞野へん程もなし、知る
べの方へ急がんと皆打連て行廻ふ人、とくと侍得し大木戸門兵衛渡平
諸共顯れ出詞、やく夫へ打せ給ふゝ都島原よ隠れなき、三浦屋の全盛太夫
高尾の君と見しゝ僻目か、まさなんふも敵よ後を見せ給ふか、歸し合して
勝負有、斯か某の關八州よ隠なき大木戸門兵衛臂利なり玄ばせ給へ
と呼へつたり、重三郎の物をも云す一腰抜て切付けば、請合して丁々々
切合後、兩攀りやうはんよ渡平の何かさしやけば心得傍、見廻して欠入間も、あら笑しき
止や、門兵衛刀打折れ、玄どろよ成てやく渡平、兩人共よ搦捕、取逃玄て
汝が科、詞つがふたあらかぶなど、口へ達者よ雲霞砂道蹴立逃たりけり
渡平の玄づく身游そらへ傍へ立寄り重三郎、や親人ヨリ何よも云なシかふ
く、ナ合点かと二打三打、打合よ体よて程能所、ヨリ捕たへと用意の早繩はやまつな

と大木戸門兵衛走、歸つて手柄くく。某程の武士なれど、敵又刀を打
 折られ逃るで、ない引立りぞく。是恥はぢ、似て恥はぢ、非ず。往時、檍の浦の
 戰ひ、箕尾谷四郎國俊、景清又刀打折られ少し汀へ引立りぞきしを、誰か
 一人憶病おもひやうとやいはん。今、代迄の美談ならず、やア最よござります。お前
 の耻はぢ、やござりませぬよ。シテ此二人ハ、どふ致しませう。知た事都へ引、是
 ハ、したりげうさんな、イヤ。此邊こちら、知るべの有奴原、取歸うけはらされたら詮せんない
 事、いつそ二人を切殺きりころし首くびとして歸りましよ。妙計めうけいく。然らば貴殿あなたに苦
 勞ながら、キ待まつよく、最前も云通いき生者殺すめうけい大きな嫌きらひましてや是
 ハ人の首、目の前で切を見たら、忽身共持病じよの癪きずや、やはり京での事ハチ
 扱てらの明あか、ヨレ私がたつた一討、お前様まことさまも夫程こへくべ、そちらむいて目
 をふさいでござりませ、妙計めうけいく。然らば仰あはせみ任まかさんと、兩袖顔わきあひを押當おさへて
 あちらむいたる其隙ひま、二人の繩なわをときほどき又またもさしやきさしやけ

ペ二人のかしこへ忍ふ内傍の烟見廻して、西瓜を二つほつさりの音
きいやり、南無阿彌陀佛^{阿彌陀}南無妙法蓮花經^{妙法}浮世氏く、二人の者を仕止た
か、何の苦もなくざつぱりと、サアくお改めなされませ、のふいやな事く
もふ見ずとよしとせふ、是れ又比興千万夫でも武士と云ひれますか、
見やふかの、氣のない物玄や、玄かしこい所を見るも、主命去ながら、
首實檢^{じゆじけん}とは古實有^{こじゆう}と、兩手を顔のふしるよし、指の間をさしのぞき、^{さしあい}
か様な、^{あいき}生顔^{せいがほ}と死顔はさうがうの替る物、今迄は二人共、あでやかな顔
なりしよ、虛氣味惡ふ真青^{まことあお}、少し赤みの見へたる、血の流たる所なら
ん、切口^{きりぐち}の立派^{りつぱい}さへ、遁勇^{あつがれ}、數手の内や、待よ待なさいよ、いかみ切た首じ
や、迎目鼻^{むかは}も、口も何よもなふ、すんべら坊主の此切首^{にぎはかね}餓^{かさ}、瘡^{かさ}りかくまい
し、斯も形の替りしは、^{ハハ}合点の行ぬ事^ごやなど、諸手を組暫し見とれ
て、^調西瓜^{すいか}がや、何と、^{ドレ}ほんよ西瓜、じや、ハチ不思議な、たつた今二人の

首打放して間もなふ、西瓜トマトよ成たひ、ヨリヤとふじや、門兵衛様ヨリヤ、只事玄
やござりませぬ、浮ハラ堂の近邊で、血をあへした其咎ミタガかそろく日暮ハシタ
成て來た、お川童様カワツチヤも出やしやる時分、用心をなされませ、ナナはそふ
云事かいやい、夫玄ハシタやよよつて首打事は、よしてくれると云たのよどふ
やら空スカイも疊カクつてくる、ヨリヤ渡平ヨリヤ、まちとこちらへ寄てくれと、そこら眺め
る其折ハサカふし、追アシ歸アキる家來共ヨリヤ、且那ヨリヤと飛退ハシタくや、私ワタシ何ナニも致シテませぬ
渡平ヨリヤが業ハサカでござります、ハ免ハシタくと手を合せ、拜ハサカみ廻りてふるい居る、是
はく正紳ヨリヤなき旦那の有様、人の見る目も恥給ハシタヘヨレヤ、家來共ヨリヤでござり
ます、何家來共ヨリヤ、そふ云て身共ハシタを化すので有ふ、誓文ハシタ、家來共ヨリヤでござり
ます、レハシタほんハシタよ家來だハシタうぬら言語道斷不屈者ハシタ、歸アシつたら歸アシつたとそ
つと云いよい事を、周章ハシタ玄ハシタうぬかしたで、武士ハシタの有まじい肝ハシタをなたね
して退ハシタた、身が目通ハシタ一人も叶ハシタぬ、何國へ成共立去と云所なれど今は

云ふ、餓鬼も人數じや、わいらでも力又成、最前聞た、お川童様のお祟
かして、何やらかやら怪しい事だらけ、一時も早ふ急がんと立歸ら
んとする折ふし、時分はよしと重三郎、浮き堂の時太鼓、玄どろ拍子又打
立れバ、皆と腰も拔、うろたへ廻る目先へすつと顯はれ出し、兩攀りやくが抑
是ハ浦島太郎十代の後胤川童の冠者乘好なり、さうらめしや腹立や汝
神慮を恐れもせず血をあらしたる咎がよりつて、早く命を召取なり、貴殿
のひぞふの情所我神變しんへんよ吸取て穴あな玄あらわやう往生わうじゆとしてやろ、氣味の悪
い、イシ渡平殿、貴様わざハあなたの氏子とやら、とふぞお託あぶを玄あらわて下され、成
程こころ、元ハお前の業わざでもない、主命故の鹿相なれど、かう見た所がよつ
程きつるお腹立の様子、遂つい一通りでり合点あてになされまい、とふした物
で有ござりますか、有ござる夫おとこをあなたへさし上て、お託言あぶごを玄あらわて見ませ
よ、ミヤ川童の冠者様畢竟ひつきやう是ハ間違ひ事、あの者がナマツハ近比ちかぢははか

りな事ながら、少々持合せの金も有バ、夫をお前より皆上ます程よりふぞ
 ほ丁簡下さります様ど、氣の毒な物でござります、私を段々頼ます、今
 やた其金を皆取て、堪忍しておやりなされませ、イヤ金銀の人間の寶川童
 道より有て益なし、只金銀の其金の後の方よりはします、彼と今の情所
 が所望なり、悲しきやどふやらおるどがくすぐつた、ヨリヤ家來共下の
 帯を急度玄めて、裏門口を用心せい、武士の有まじい、屋敷を餘り急いだ
 で、不斷の儘の越中禪玄まりがなふて便ないど、主も家來も懷へ、手を入
 玄める下の帶、下心有浮世渡平、きやつ出家だけ欲氣なし、物を云して
 悪からんと傍へ立寄うやく、敷もうすく、うさすにもふさきかぢん
 ぶりかくさんきんみやうらい、とらやわくと低頭平身、なしければ譯
 り知れどきやう者、出たりめせりふの唐詞、やうらいといつうべてれ
 んてうかすてらやうかんのせたんけい、聞ち渡平のこなたへ歸り、あな

た様ようより龍宮育りゆうぐういく日本詞にっぽんことをお遣おとみなさるりや、どふでも勝手かつてが違ちがふ故ゆゑ、ほ
苦勞くろうなだけ腹立はらだつもきつい、そこで今いまの様ようより龍宮詞りゆうぐうことで請答うけこたえ、先まへの神慮じんりょを宥ゆる
て置おきた時とき、只今いまおつ玄くつろやつたれ、地獄じごくの沙汰さたも金かなとやら、龍宮界りゆうぐうかいも有様ありよう
の去々年よとせんの大飢饉おきあんで、米こめが百ひゃく又また四合五勺よんがくごしやく、其そのあげく故ゆゑきつつまり、成程路
金ろきんを皆みなふこせ、又また前まへの大事だいじの物ものを、今いまの金かなと一所いっしょ又また上あがたら、今いまの穴銃あなじゆう
往生わうじやう赦ゆるしてやろとののにたくせん、早く早はやふお上あがなされませ、何なんと云いうぞ貯たまた路銀じゆぎんと、外ほかよ大事だいじの物ものと云いうぞ、ハレハレ主人しゆじんよりたまひつたる此この指添さしだ
二色いろさへ差上さしあげられべ、さしあげ了簡りょうかん下さるか、添あわせししくくと、懷中かいかうさがしこてこと、
取出だす肌はだうちがへ、有あたけこたけ、指添共さしだとも、一つひとつ又また擗うみみ、是これをあなた
へ上あがてくれ、一時ひとときも早いがよいぞ、よく浮世うきよ、マタまたお待まよ、侍しやくの事ことなれ
ば、腰こしの物もののなくともよいが、折入おりこむて相談あうだんが有あ、爰から京きやうへ餘程よごの道みちで
ござんすござんす、うんうんと云いなく、承うけ知しかく、此この金かなを皆みな上あがてな、うん

と云な／＼、承知か／＼、そばを一膳くふ事がならぬ、^{ヤハハハ}うんと云な
 く、承知か／＼、爰へどふぞお情^ハやが、南鏡^{カミラヤウ}一片残されまいかな^ヨ、け
 ちな神^ハ物^ヲ惜^シと、忽罰^{ハサマチ}をお當なさるゝ、^{スリヤ}罰^ヲお當なさるゝか^{ハテ}是非
 もない事^ハやな、そんなら南鏡^{カミラヤウ}とい云まい カあなたの名^ハかたどつ
 て川童六十四文^ハ成まいかの、一文もきなかも成ませぬ、^{スリヤ}一文も叶^ハ
 ぬか^ハはつと計^ハ聲^ヲ上^ハかつばと伏^ハと云事^ハ、此時よりぞ始まりける、
 ハ、ぐづくと早ふお上^ハなされと惜^シがる物^ヲ無理^ハ無躰^ハ引たくつてこな
 た^ハ向^ハひ、青黄赤白黒^ハり、^ハりこん路孝茶中赤藏^{カハ}、おいてうかふたんぶたう
 んすん、辰^{ヤク}と差し出せば、氣味悪そふ^ハ手^ヲ取^ハて、かねんをどるんは
 嬉^ハしが、どうやら尻んがきそんべか、牛^{ヤア}、^{ヤア}門兵衛様^ハ、^{サア}川
 量様^ハの機嫌^ハが直た^ハ、神明のう玄ゆの印^ハの方々^ムとく、福壽^ハ
 海延滿樂^{カイエンマントク}天筆和合樂^{テンビツワガク}の、大福長者^ハ成けつかふな文^ヲおさづけなさる

とぞ皆さむ講なされませ、我等は其内神前をばらる、清めて參らんと、何國共なく出て行コリヤク家來共、只今おさづけなさるゝぞ、うぬらも心を乞
やう玄やうみアリガタ有難ふござります、ヤレ、皆の衆よ正直玄やうろよ我へ
めて壽福の爻を授ヨブべし、龍神詞は分るまじ、日本流ハナシおしゆべし、皆ヒツ信
心こらしつゝはやしてくれよほんふたちハシマラシタチ、はやしてくれよ
ほんふたちハシマラシタチ、左の腰を延のべ其上ごじ右の手を奉サルとしてたいしを開き玄
やうしのかうをまけ左の掌たまこの上うへ置事しやほんのとく是を以て則七
度玄ハシマラシタチせば貧所忽福者ヒンジヨウタチホと成寶タカラの藏をならべ立む里やうのざい福
をがうまんする事、雨やあられのふるが如く金と銀と錢とるりと玄や
ことめなふとさんごと琥珀コハとしん玄ゆの七寶玄ゆつしやうして大福
長者と成なむはく玄やきやうかやしやぎやらべいしんたまよひん
てんうんそはかなふまくさらはたゞきやていひゆび玄んばほくけい

びやくさらばたけんうどぎやてそはらけいまんきやきやなうけんそ
れかでこくさい玄やううかやとんとく如意寶珠わうたい辨才天、そし
てこそくとこそ立歸る

○第六

いつまでも、かのらぬに代々、相竹の代より幾千代、八千代ふる千代を壽
く爪音つまおとの、鎌倉山よ美びを盡す、冠者太郎義綱公の奥に殿だい、情弱じやくの聞へ隠れ
なく砂川へ隠居有けれど、は長男鶴喜代丸幼稚ちゅうわながらもは家督定り、近
き頃ころより病氣迫、お傍には男を禁じ、諸士の對面叶おひなべ家中を始め典
藥迄、何と思案も煎じ様常より館物さびし、諸士頭信夫の庄司爲村の後
室沖おきの井い前渡會銀兵衛が妻の八沙、福姿ふくしきしとやかみ、禮義正しく打通
り、調イヤ八沙様、大殿義綱様に隠居を遊ばし、は幼稚ながらは家督の鶴喜
代様、此程より不快迫ふくわいの食事も召上れず、殊更人ことよ逢給まつりふ事がは嫌ひ

迎、男を禁して近習小性も遠ざけられ、お傍より政岡殿、姫衆の外叶はず。何卒直より容体窺ひや私が心さればいな手前の夫銀兵衛より膳奉行と言、今後見の刑部様の出頭、夫さへは對面叶はぬとは、ヨリヤ政岡の胸中より深い所存が有ての事か、けふは是非共に容体見届ねば下られずと、奥女中迄入込置たれば、保養旁追付是へ出の筈、何かの様子とつくりと心をあ付遊ばせど、二人が噂の程もなく、奥より姫走出殿様是へ出と知らせの中よりまだやわんせなき鶴喜代君お傍のお伽もおなひどし、政岡が子の千松が、かいて出たる鳥籠の、ミツバチ愛しき跡と付添ふお乳の人、ばつと二人の頭を下て恐敬ひ奉る、政岡より前より手をつかへ信夫の庄司爲村の後室沖の井、渡會銀兵衛の内方八汐より病氣のお様子窺ひの爲參上と、や上れべふとなしく二人共よみ見舞てくれた、大義くと情有仰よりつと愚入我より存せしむは雖しきに容体見奉て我より安堵去

ながら食事進み給ひぬ由、一家中の心遣ひ、恐ながら沖の井が、乍付し今日の膳、少し成共召上り下さる様、ソレ早ふと詞の下、ばつといらへてお傍の女中、捧る膳の目八分、前より直せバ、嬉しげ、そんなら、飯くふても大事ないかと、座より付給ふを政岡が、尻目よりらまれもぢくと、イヤくおりやモサ飯、いやぞやく、ア見よ千松雀が飯をくひたひやら、口を明て泣、いやい、ヨイいやつぞやと、乳母が顔見やる目元より涙ぐむ、心根のいたりしさ、じつとこたへて政岡が、ナ、ナ、お二人様、あの通り膳をお進めナしても、いやぞやく、と意遊ばす、お傍より付添政岡が心遣ひ、推量下さりませ、カ醫脉を窺ひナさん、も、男たいせし者、お嫌ひ、夫故、典藥も、此八汐がそこへ心の付し故、典藥大塙道益が妻の小巻、女ながらも夫より、醫術の譽、容脉窺ひせん爲召連て参りし、召出せと詞の下、ばつとお次へ、姑がやがて伴ふ年、四十より近き

二つハげ福さべきも、玄とやかよ遙末座み手をつかへ、恐れながら、大場道益が妻の小巻に脉窺ひ奉らんとすり寄べ政岡が、いざと進めよ鶴喜代君、ほ手を出させ給ひければ、恐れ慎しみに脉体とつくと窺驚く面色アコヤ是只今必死の脈といふよ、胸アツり驚く人ヒト暫し、詞もなかりしが、沖の井に前不審顔アシカニシイケンコレ小巻に物ごしに顔色常よからぬ様子、夫よ必死の脈と、ハ成程に不審に尤モ仰の通り、艶しきに容体夫よ引かへ絶命の脈、何共不思議、恐れあがら若君様是へに越遊オカニばされよと遙こなたへ誘ひて、またも窺ふに脉よはたと手を打ち、ハテ不思議や、あれみて見れば必死の脈、今又是よて窺へバ、常よ替らぬに脉体ハテ怪しやと眉アカよ乞アガフ、政岡始人ヒトも更よ心ハふさまらず、何思ひけん沖の井に前長押アカハシよ掛たる長刀追取アサヒタツぐつと突込天井の板こじ放せば怪しき曲者クセモノ落るを透さず取て引伏、用意の捕繩手アリキナシ手ハシしかく高手ハンド小手スモウく上り上、お脉の

不審の其根元^{こんげん}サア真直^{まっただ}又白狀せよ、陳^{ちん}する又おいてハ水責^{みずせめ}火責^{ひせめ}憂目^{うめ}を見^みするぞ。サア何としきめ付られてコソヤマツク、イヤモ斯顯^{カケアラバ}るも上から有様^ス。ヤマツク鶴喜代君を殺^{ころ}してくれど、頼まれたも褒美^{ほめ}がほしさ、シテ其頼人の名ハ何と、サ何者又頼れた、サアどふ玄や、サア何とし俱^{とも}詰寄政岡^{マサニ}が顔^{あがめ}を詠^うて、ソレ扱^{あつ}もア玄はらし^い顔わいの其頼人^ハ誰で有ふぞ則^{こな}た。何とソレもふ隠^{かく}しても隠^{かく}されぬ、千松^{チヨウ}とやらを代^え立たさ、若君を殺^{ころ}して、吳^オとナシレ頼^{まつ}ま玄やつた玄やないかいの、ナコ下郎めが大それた偽^{いつ}り言^{コトヤ}自^じを科^くム取^とて落^{おち}さん爲^{ため}、己^{おの}を頼んだ辯事^{べんじ}玄やな。イソ政岡殿^{マサニ}、いか様^スわらがれても、こなたの工^{たくみ}といふ事ハ此八沙^{ハチサ}がよらん^{よらん}で置^{おき}た、逆^{そば}叶^{かな}はぬ覺悟^{かくご}召^めれ、仮初^{かりそめ}ならぬ一大事^{だいじ}、とつくりと正^{ただ}しもせず、わらが業^{わざ}とおつしやる^は、何ぞ慥^{だしか}な^ま、證據^{しじゆ}といふ^ハ其曲者^{くわじやう}、サ現在^{ざいぜん}こなたを傍^{そば}又置^{おき}てあの通りよいふから^ハ、モ是^メ又上^うこす證據^{しじゆ}ハない、サまだ其上

よシ此一通、鶴が岡の神木の本又埋て有た釘付の箱内又込たる願書の文言、若君を讃伏し、我子を出世させたい望、願主松ヶ枝節之助、乳母政岡と、有」と書いたが慥な證據、何と違ひは有まいがの、夫も眞赤な似せ筆、更に此身又覺はない、無實を云かけ跡で後悔なざるしな、是程慥な證據が出てもまだ潔白ああらがひ達シテ又覺ないと云々證據が有かな、夫ハサク何とし、詰掛られて政岡が、覺なき身の云譯も、證據なれば今更又無念涙の外ぞなき、云譯は有まい、云譯なくば遁れぬ科人、節之助諸共又牢屋へ打込急度糺明、今日より若君の守役ハ此八汐、侍中政岡をくらり上牢屋へ引と呼はる又ぞ、若君のふろく涙乳母が牢へ行なら、おれも付て行たいわいやい、そりや何を意遊ばず八汐がゆ事よふお聞遊ばせや、あの政岡ハな、君又敵たふ大科人キ科人でも大事ない、乳母はどこへもやる事ならぬ、伯父様、刑部様の仰付、

其刑部もそち達も皆おれが家來ぢやないか、夫程牢へ入度バ政岡が替
りよ、そち達から牢へ行、乳母と放れて居る事ハいやぢや、ハとわんぱ
くも、自然シザンと備セキれる仁心ハニハ、嬉しさ限カギケ政岡が、身ヒよしみ渡ハセる有難涙ハサ、只手
を合す計なり、遠ミテガの八汐も主命ハムメイ、返答ヘンダなければ沖の井に前君ハマツクの仰迄オハセる
なく、お乳の人は科はなし、朝夕お傍を片時放れぬ政岡殿、サ誠若君を害
せんと思ハ、人手を頼迄もなく、仕様もやうも有べき事ハ、夫ハ何ぞや
此曲者、誠政岡ハ頼まれなべ、一旦は隠遁ハシタるゝ筈ハシタ、自ハが長刀の光りよもろ
く飛ハシタおりしは、ハチ頼もしる頼人ハタシタ、又道益が妻の小巻、必死の脉ハシタと言たるも、
あまり割符が合過て、此沖の井は呑込み、ハヤ夫計でない此願書、願主極
が枝節之助、政岡と有るからは、ハヤ夫逆も同じ事、かゝる大事を工ハシタむ物
が有ハと名を顯アラはし、證據ハシタの種ハシタを残し置ハシタみや、サ若や其名が八汐と有ば
お前は科をかぶる氣か、セあんまり工ハシタみが浅ハシタはかで、詮議達するお人迄

底意の程が心得ぬ、曲者めを拷問して、五十四郡をのまんとする工の底
を白狀させ、惡事又組する方人共、一々首をならべて見せう、とつくと
見物なされよと、此場の善惡明白又見通す如き辨舌べんしきの實じつも信夫の後室
と、奥床おくゆかしくぞ見へよける、理の當然又ひしがれて、八汐やしおの猶もへらず口
チモつべこべとよふおつまやるの、カ所詮分らぬ水かけ論、エいつ迄云て
も同じ事、マ此儘又差置さしおきて、追ての詮議夫迄まで小巻も下つて休足ゆきあし召れど、
目くばせし伴ふ二人又一物の、有と見抜みぬきし後室の眼鏡めがねはづさぬ一捌さばき、曲
者引と、嚴重又心こころへだつ、竹の間の襖押明入ふすまよける、跡見送りて政岡が
まさなき事も身みかゝる、科こはれても晴やらぬ養いくひ君の行末ゆきを誰又
問べき様もなく、心一つの憂思うきひ物あんじ成母親の顔を詠る千松又鶴
喜代君も打守り、乳母おとこ何云ても大事ないかや、アイく外又誰もをりませず、何成共に意遊おもてあそばせ、ほんよさつきよ沖の井殿、若へに膳ぜんを上た時兼

て乳母がやた事お聞入遊べして、よふマアお上り遊ばさんだナア、夫でこそ此乳母が、お育やた若殿様（チ）、お出かしなされた天晴など、譽（ほめ）ればあどなき稚氣（ちわざき）、（開）乳母ひもじいと云事（シ）、強（よ）ひ武士の云ぬ事と、常（つね）そちが云た故、おれ（ハ）云ねど、さつきよから空腹（くうはく）成た（ハ）やい（キ）、お道理（ごぢい）でござります、けふ（ハ）思（おも）ひぬ事故（じこ）、ほ飯の持（じし）へも遅（おのづ）成、あなた様（よう）も懸（まわ）お待兼（まかね）千松もよふしんぼう玄やつた（モタ）持（じし）へて上（あ）ますと立上（あ）れば、（開）乳母爰（さちかね）有此膳（ぜん）をたべるの（ハ）悪いかや（マ）、（シ）其（その）膳（ぜん）を上（あ）る程なれば、乳母も苦勞（くろう）致しませねど、此程から怪しむ事共、忠義厚き沖の井殿、差上（あ）られた其（その）膳（ぜん）疑（ひ）ひ（ハ）なけれ共油斷（ゆだん）のならぬ此時節、上（あ）てよければ此政岡（シヨウカウ）が上（あ）まする、（シ）よふお聞遊ばせや。今お館（やかた）よ（ア）悪人（あくじん）はびこり、（シ）近習（きんじゅ）小性膳番（こじょうぜんばん）迄（まで）ちつ共心（こころ）の敵（むし）されず、忠臣の節之助（ハ）、不義者逆遠（ひきとおと）さけられ、力（ちから）とする者（もの）な、朝夕のお膳（ぜん）の皆廻（まわ）へ捨（す）せて、私が手づから持（じし）へて差上（あ）るも

若毒藥の工ハラフもと、みぢん心ハラフの赦されず、空腹ハラフなもの道理ながら、ほ前のね
こらへ遊ばす爲、此千松も四五日前から、三度の食事もたつた一度、忠義
故玄やとこらへてあります。千松そなたハシマ云事よふ聞て、何共云すよ
辛抱ハシマするチ、賢いカシトく、強いツコく、强者じやと譽ハサウれば千松ハシマ、嘆様ハシマ、侍の子と
いふ物ハシマ、ひも玄いめをするが忠義玄や、又たべる時よハシマ毒でも何共思
はず、お主の爲よハシマ喰ふ物ハシマ玄やと云玄やつた故ハシマ、わ玄や何共云すよ待
てゐる、其替ハシマり忠義を仕て仕廻ふたら、早ふましをくハシマしてや、夫迄ハシマ翌ハシマ
迄ハシマもいつ迄ハシマも、こふ急度ハシマすれつて、お膝ハシマみ手ハシマをついて待てあります、お腹
がすいてもひも玄うハシマない、何共ないとぢう面ハシマ作り、涙ハシマの出れど稚氣ハシマ
譽ハシマられたさが一ぱいハシマよ、こちや泣ハシマのせぬハシマへと、ひたいを撫ハシマて泣顔ハシマを隠
す心ハシマの流石ハシマよも、名ハシマふ武士の種ハシマなりき、母ハシマけなげさいちらしよ、目
え持涙ハシマ心ハシマよ、ほ前ハシマと開す譽詞ハシマ、「そふ玄やく、强者玄や、千松ハシマのいかう

強ふなりやつたわいの、千松よりおれが強いた政岡、おれのちつ共空腹
 よはないぞよ、大名といふ者に、飯も何よもたべずよかふすりつて居る
 物がや、ン、乳母、おれの強者がや、是へ又けふとい事がや、そふは行儀な
 所を見ては、赤く千松などは叶はぬく、チ、お強いく、そふお強ふてり、
 ヨロヤ早ふ飯を上さ成まい、ド游ふとかい立て、かたへよ飾る黒棚より、出取
 す、錦の袋物、風爐、又掛たる茶飯盃の湯の心見を千松よ、呑す茶碗も樂な
 らで、お末が業を玄がらきや、いつ水さしを炊き桶流す涙の水こぼし、心
 の清き洗ひ米、釜よ寫して風呂の炭、直してあをぐ扇さへ、骨も碎くる思
 ひなり、テもふ飯がやど機嫌の、我子も共よ悦び顔、見れば胸迄突かく
 る、涙呑込く、でモウ上ますぞへ、嘆様早ふ上ましてや、チ、上ませいで何と
 せう、今上ますするまちつと、煮たつ其間、お氣よ入の雀の子、モ親鳥が来る
 時分、そこへ直してお慰、イイと千松が返事ひすれど立なやみ、歩む姿も

たよくと置直したる小鳥籠忠と教る親鳥の、軒端の竹と飛かれす子
の孝行と面やせてはごくみ返す鳥羽玉の、涙を隠すうない髪かされば
直よまゝ成る。ソヤもふ飯じやと悦ふ子コレ千松、何共ないと云下からせ
れしない何の事哉や、いつも唄ふ雀の歌唄ふては前の機嫌とりや、
どんな子で有りいとしかられておろく、涙玄やくりながらの玄め
り聲、ごちの裏うちのちさの木々く、雀が三羽留つてく、一羽の雀がいふ
事ふやく、夕べ呼だ花嫁はなよめく、竹の下葉したばを飛おりて籠かごへ寄くる親鳥
の、名なみをすれば小雀の、はしさし寄る有様よう、コレ乳母、雀の親が子と
何やら喰くしをる、おれもあの様よう、早ふ飯がたべたいと、小鳥をうらやむ
心根こころね、道理ごとじやと云たさをまぎらす聲こゑも、ふるひれて、わしが息子
の千松がく、コレ千松殿様の機嫌きげんを、何を澁顏しづがいする事が有ちいそ
ふても侍女ヨレウダや、七つ八つから金山かなまきへく、一年待共まだ見へぬく、乳

母まだ飯の出来ぬかや、もふ出來まする、二年待共まだ見へぬゝ、嘆
様飯のまだかいの、せりしない、そなた迄が同じ様行儀の悪い、イエ
わしひたべたい事のなけれど、お前様がおひもじからふと恩ふて、何
のお強いお殿様が、おせがみなされうシリヤそちがせがむのじや、イエ
れせがみの志ませぬ、チセがまづば今の歌聲張上て唄ふて見やと、云れ
て涙の聲張上、ぼろりくとお泣やるがく、力なくく泣聲を隠て連
る母親が、何が不足でお泣やるぞく、歌のせうかも身よ當る涙のお乳
母が子故の闇ぞやるせなき、若殿小影を打詠め、アレく千松ちんがくる呼
べく、ちんよこいくと、呼バかけくる様の上、よい所へよふ來たな
ほんよわれの仕合せ者、おすべりの此ほせん殿様の機嫌を直したほ
褒美戴と紙折してならぶれば悦公体を見る若君、乳母おりやアちん
み成たいと羨み給ふ後不情聞悲しさを堪へ兼て、お道理じやく日本

國の其中又幾億万と限りなき人の果報を請給ひ五十四郡の主と耀
榮花へ上もなき何くらからぬ身みて思ひがけないに辛抱縱賤い
下々でもこふいふ事が有物かましてやつゝ見も聞も涙ながら政
間がナ事逃ふとなしう聞入給ふいたはしや現在内に家來が邪非
道又組したがひ殺害せんとの工みどり知たる故又影身又添おまめな
に身を以病氣と世間を偽胴欲よ稚いに身よ朝夕さへ思ふ様よ上ぬ故
鳥獸の名ばむをば羨しがるおん心に尤共お道理共云又云れぬに身の
因果雀や犬よおとつたる宮仕へして忠義じやど云れう物かと喰しべ
り胸も熱立風爐先の屏風よひしと身を寄て奥を憚る忍びなき稚けれ
共天然よ大守の心備はりて乳母何で泣のじややいそちや千松もた
べぬ内おれ一人せはしいと思ふならモ堪忍して泣てくれなそち達二
人がたべぬ内へいつ迄もおれの堪へてゐるおれがたべても乳母がた

べすよ、死よやつたら悪いナ千松、そちが死でも悪いナハイ〜〜よふおつゑ
 やつて遣はされます、有難ふにざります、乳母が今泣たのはな、アリヤま、飯の
 早ふ出來るまじない、何の悲しる事ハござりませぬ、ヨレ涙ハないナほらう
 しませホ、ハ、おかしい〜〜今のもじなるで、モッ飯が出来ました、いつも
 の様、握〜〜して上ましよと、いひがひ取て手の内に結ぶを千年と待
 諫て手を出し給へペ、マアお待遊ばせや、吟味の上よも吟味せねば、辛抱
 のかいがない、先ほ毒味と千松が、顔を詠めて、氣遣ひないナ、ほ膳、お心
 しづかよ召ませど、云ふまいそ〜〜ほ悦び、千万石を手の内よ握るほ身
 よ引替て、只一握りの握り飯を數の珍味と思召、ほ心根の勿體なやと、君
 を思ひ我子を思ひ、心の奥の忍ぶ山忍び、涙の折から、梶原様の奥方ほ
 入なりと、呼はる聲、ハテ心得ぬ梶原の奥方とい、何よもせよお通しナセ、レ
 千松、そなたハ次へ、常ニ母が云し事必ト忘まいぞ、早ふ〜〜と追やつて、

衣紋繪ふ其内又沖の井八汐も出向ひ敬ふ襖押ひらかせ、梶原平三景時
の奥方、夫の權威又榮に前立とくと上座より直り、それくも出向ひ
太儀自今日來りしハ右大將の上使、夫景時承られ共、義綱の一子鶴喜
代病氣よつて男たる者を禁じたると聞し故夫より替る此榮義綱隠居
の其後鶴喜代の所勞殊々食事も進まぬ由、心を付られし此菓子頼
朝公より下され物、有難頂戴有と持せし菓子箱差出せバ八汐引取、
難い大將よりの下され物、サア若殿様、早ふ頂戴遊ばしませど、蓋押開き、
まあ見事な結構な此お菓子、召ませと差出す、流石童の嬉しげよ立寄
給ふ鶴喜代君、ナリ前様、又其様なさましい事に病氣の身なれば、お
毒よ成たら何となざる、こづちへお越と政岡が、詞打けす榮に前、ア頼
朝公より下さる、お菓子、何疑ふて頂戴させぬ是非此榮がたべさせ
バ夫でも、但し頼朝公の仰は背いても苦立うないかサクと權柄押

奥を走つて千松が、其菓子ほしめと引摺み、何のぐんせも只一口八汐
が恂り榮に前、毒の工みの顯れ口、忽のうらん目を見詰蹴ちらかした
る折にさんらん、八汐にすかさず千松が、首筋片手も引寄せて、懷劍ぐつ
と突込めばわつと一聲七てん入たう、驚く沖の井政岡が仰天ながら一
大事と、若君押やる我部屋口、戸口も付添守り居る、何をざりく、され
ぐ事へないわいの、忝も頼朝公へ下されし此折蹴破左へ上への不禮、
ちいさいがきでも其儘より差置られぬ、夫故も手もかけたり、お家の爲を
思ふ八汐が忠節、可愛そふゆく、いたいかるのふく、他人の私
さへ涙がこぼれる。ヨ政岡殿現在のそなたの子、悲しうもないかいの、何
のうお上へ對して慮外せし千松、成敗に家の爲、是でもこなた
に何共ないか、是でもかくと、なぶり殺しよ千松が、苦しむ聲の肝先へ
こたゆるつらは無念さを、じつとこらゆる、辛抱も只若君の大事ぞと涙

一滴目ひとしづめと持もぬ男おとこまさりの政岡が忠義ちゆうぎの先代末代迄又まことに有あつまじき烈女れつじょの
鑑かがみ今いま其名なまへ、かんばしき築つき一端終はぢめ政岡がそぶりよ氣きを付打うち波なみしくみ、
玄あわやべつて、すつての事ことと大事だいじの工たくみ、ヤ大事だいじの菓子がしを荒あらした科か穀こした
八汐はしおが働きはたらき、流なが石いし渡わた會わい銀兵衛ぎんべゑが妻程めいじゆ有あつ政岡せいおかより自じが云い聞きす事ことも有あつ、沖おき
の井八汐はしお兩人りんへ暫しばらく次つぎへ間まをへだて、遠慮えんりょ召めれど築つきの詞こと、何なんと違變ちへんも沖おき
の井が深ふかき心こころへ和田津海わだつひの沙さの八汐はしおも打連うちづれて伴ともひ、一間いつまへ入いみける跡あと
先見廻さきみまわし築つきは前まへ政岡せいおかが傍そばよすり寄よせりよせりて、年比仕込ねんひしごろしそなたの願望がんぼう成就じょうごうし
て、嘸よ悦えび、何なんとおつ玄あわやる、ハモ隠かくすよう及およぬ東西とうざいわかぬ内うちよりも、取とり替か置おきしそなたの子この、鶴喜代つるきよしが身みよよ恙いたずらなふ、義綱ぎこうの誠まことの船ふね、千松せんそうが此こ最期さいご
嘸よ本ほん望もちで有あつふのふふ、取と替か子この様子ようしょへ先達せんたつて知しつたれ共とも、もしやと思おもひ
最前さいぜんから、覗のぞふて見る所ところ血筋けつきの子この苦くるしみを、何なんば氣強きつぱい親おやぢでも、こた

へらるゝ物モノではない、若殿わたくしとして量も我子わがこが大事だいじ、そなたの顔色がんしよく替かわらぬぬ。取替とりかえ子こと相違あぶらわはない、スリヤ皆心みなみに同腹どうはら中なか、刑部殿けいぶでん共内談うちだんなし、諸事我夫わがふの差圖さしお有あん、先今日きょうの立歸たてきり、病氣びやうきの様子ようすナシ上あん、必ひく何事なんじも、人ひとと悟さとられまいぞやと、一人呑の込のゆうゆうくと館やかたをよして歸からるゝ跡あとみハ一人政岡まさおかが奥おく口くち窺くわひくひくて、我子わがこの死骸しがいいだき上あへへし悲かなしさを一度いちどよわつと溜たま涙なみだせき入いれせき上あ歎なげきしがよ千松せんそうよふ死死でくれた出でかしたななく、そなたが命まこと捨すてたゆへ邪智じぢ深い築つき前まへ、取替とりかえ子こと思おもひ違たがへ、己おのが工くわみを打明うちめし、親子おやこの者が忠心ちゆうしんを、神かみや佛ぶつも哀あはれみて、鶴喜代君つるきよしの武運ぶうんを守まらせ給たまふかか、有難うれやく、是これといふのも此母このおやが常つねく教おして置おきた事こと、稚心おさむと聞き譯わけて、手詰づめよ成なた毒害どくがいを、よふ心こころ見てたもつたのふ、出でか玄あらやつたくく、そなたの命まことの出羽奥州しらわおくしゆ五十四郡ごじゅうよんぐんの一家いっか中なか、所存そぞんのほどを堅かためさす誠まことみ國くにの誠まことぞや、と云い物ものの可愛かわいやな、君きみの爲ため兼あわてより覺悟かくごの極きわめてぬな

がらも、せめて人らしる者の手よかしつても死ぬ事か素性賤しる銀兵
衛が女房連の劍よ掛りなふり殺しを現在よ傍よ見て居る母が氣へど
の様よ有ふとふ有ふ、思ひ廻せば此程から唄ふた歌よ千松が、七ツ八ツ
から金山へ一年待共まだ見へぬ、二年待共まだ見へぬと歌の中なる千
松は、待かい有つて父母よ顔をば見せる事も有ふ、同じ名の附千松のそ
なたに百年待たぬ千年万年待たぬ、何の便りが有ぞいの、三千世界よ子
を持た親の心は皆一ツ子の可愛さよどくな物食ふなと言てしかるの
よ、毒と見へたら心見て死でくれいと言様な胴欲非道な母親が又と一
人有物か、武士の種に生れたぬ果報か因果かいぢらしや、死るを忠義と
いふ事へいつの世からのならむしだと、こりかたまりし鉄石心、流石女
の愚よ返り人目なければ伏まろび死骸よひつしと抱附前後不覺よ歎
きしことはり、過て道理なり後よすづくと八紗が大聲、何もかも様子

聞た、こつちの工みの妨女、己も生ては置れぬと、詞の一間押明て、不
恩不義の銀兵衛夫婦、工みの次第白狀せよと、立出る沖の井、此八汐又
白狀といふ、其證人へ爰又有と、言つし出る顔見て、悔り、そちは小巻。
罷い證人で有ふがの、夫道益又言附て、無理又毒藥調合させ、此事外へも
らそふかと、よふ夫を殺したな、夫の敵と思へ共、女の身の討事叶はず、態
と悪事又一味して、まつかう手めを上よふ爲、鶴喜代君と千松を、入替子
と言たも小巻、夫故又藥に前、うまく此場を歸りしも、裏の裏行ヒ加減、
ア真直又白狀と、忠と不忠の喰合せ、毒藥かへつて藥と成顔又似合ぬは
いざいざ、たゞひ内義の手柄なり、モウ是迄ど八汐が懷劍心得政岡請流す
互々嗜む太刀さばき手をつくしたる、二人の女、我子の恨一心又突込餞
劍打落し、直又切込八汐が肩先、ひるむを取て突通され、こくふを擋でも
がき死、惡の報ひは忽又心地よくこそ見へよけり、手柄くくと沖の井小

卷、共々悦ぶ況からず、物音人聲されがしく、人音の様の下、油斷ならざる若君の身の上も氣遣ひ也。ア 始中明しく、はつと答へも銘々手燭、手で又一腰長刀もきらめき渡る様の下、身の鐵石の節之助寄くる忍びを入碟、ばらりくと投ちらす物のあいろもくら紛たけべつくんの大風、口よくいし系圖の一卷飛鳥のごとく欠行を透さぬ松が枝小柄の手裏剣鼠の頭忽よばつともへ立ほのふと共にすつゝと立たる異形の姿ア不思議や、密々とのゐの様の下斯取かこみし曲者はらさいぎよ紛れあらへれし群みすぐれし大鼠、まさしく忍びの幻術成か、ハ、怪玄やナ此一卷を奪ん爲、大願成就嬉玄やな聲にはるかよ節之助、曲者待と聲々早くはつしと打たる以前の小柄心得松が枝忍びを楯、胸先血煙り曲者の跡をくらまし出て行

○第七

休めく、おらが旦那明衡殿へ、人遣ひが能と聞、跡の季から住で見た
 が、此頃の闇敷は是で、骸がつゞかない、夫も専内が云通り、朝から晩
 迄、衝きどうし、其上、京都から、上使とやら、檢使とやら、けふ此所へ来る
 と云て、あの様よ幕打廻し、饗應玄やのほ馳走のと、酒や着でませかへす、
 残らずあれを喰ふて、有、おいらすぐちむな腹で、寒暑の此尻を、明六つ
 えほ戸帳開き、夜九つよ開帳して、着の身着の儘轉りとやるい、無便事で
 れないかいやい、ヨリヤ是專内が云通り、中間の身の上程、うち見よハ美よ敷
 て、無便者の上へなし去ながら悔なく、此身の上よも樂み有、最前幕へ
 運ふ内、ちよろりといがめた。此樽、三人寄て呑ふ玄やないか、是ハ出か
 したすべやいやつ、着などゝ、榮耀の沙汰と、芝よ、べつたり毛だらけな
 尻かたばみよ押直り、さいつざしつたべつ押へつ呑程よ酒もよい程
 回り口、江戸兵衛茶碗下よ置、何ぞ着がほしるなア、幕の内よこそ着ハ

たんと有らん、知た事、此専内が運ぶ内、一ゝ蓋ふたの取て見ねど、大方中の
鮓あさりの酢和鮪すあへまぐろのさしみきらすの煎上いりじょう、こはだを魚田うおだよし、夫から段だんにて
うじて來たら、湯豆腐ゆとうふなど、奢わざなで、あら、ヨリヤ江戸兵衛、我の其様な料理を
べ喰くた事は有まいな、扱あつもこいつへきつるげび藏くらわ、喰物の事計ぬかし
おる、添かたも此江戸兵衛、すいとの水で育そだつた男、其様なひれつな事ことに
存ないわい、ヨリヤせん志せんじやうをぬかすがな、江戸えど、江戸えどでも、大方裏屋かたうちや
九尺店くつきてん一つべついゝ割鍋われなべかけ此ごろの米こめの高たかし、其日そのひの小買こめいで有
し所ところを云いて聞きそか、聞きふか、云いぞよ、聞きぞよ、抑そぞく此男の住すみたる所ところは淺草あさくさ見
付つけの邊へりよ於おて、嶋屋しまやといへる現金店げんきんてん、先其間口まちまぐちが五十間、奥行が五十五
間、土藏どくら作り、家いえを建たて、ア藤井とういと書かしのれんを掛かか、番頭ばんとう手代子供迄まことに六百人
餘おほの人を遣おとひ、某もとは其中で、番頭殿ばんとうでんか、や飯焚殿めしにだんじや、本もと人の行末いわきと白しら

水の流れ程知ぬ物のない江戸の者が奥州三界わいらと附合も他生の
縁、^{イヤ}又江戸の繁昌が見せたいわい先現金店と云物のな手代衆が二百
人計、抹香もつた様よつらりとならぶと、店よ子供が立て居てお這入な
さいや玄やふ是へくく時よ女中环來ると、お出なされませ、今日の長
閑よござります、此間の地合を最一度お覽じませ、子供や、ハナぐらるの
八丈替り鳴、十四五反持ておじや、勘三に覽じたでは座りませう、羽左工
門もきつる評判でござります、判取などやらかすり、ハナ扱夫の賑ひ
しそふな事じやな、玄たが其勘三羽左工門といどのお屋敷の住家老だ、
ヨイツバ生得田舎の芋堀だ、ヨリヤ其勘三羽左工門といふれな、日本一の歌舞伎
芝居、^{イヤ}又其繁昌が見せたいな役者と云物がたんと有て、義經をする時
の義經、金平の金平、傾城の傾城と夫くよ分る所が妙だ、夫も一生得見ず
み見せたいな、見たいな、^アじやが此様な遠國よ生れて、夫も一生得見ず

よ仕舞まであろとさうドトが打志うちほるれば道理道義くク去ながら江戸中市
生れても、屋敷方の奥女中、又町方の奉公人、芝居を見るは一年よ漸ゆきて一度か二度、其様な人より彼聲かのこゑ色でたんのふさすり、何聲色ほけいろとい聞ない染色だな、ミかバ色の事である、但シハ萌黃もえぎか花色はないろか、ミ其様な事じやない、今云いわた役者やくしゃの聲こゑがらを、ミとつと其役者がそこへ出た様よう似せるのじや、おれも江戸よしよ居た時とき、其聲色こゑいろを遣ふ事が大名人めいじん、聞てが有なら聞したいと、口から出儘だいひの太平樂たいへいが、聞て皆みなよこぞり寄よせ夫おハ何より面白おもしろから芝居しばゐを見る事ことならず共ともせめて其かバ色とやら聲色こゑいろとやらが聞きたいなアどふぞ一口所望ひとくちしやうじやと、せがみ立られ今更さうがよ、知らぬしらぬとい云いれぬ時宜とき高たかで向むかふむか田舍者いなか、知らぬしらぬを當あみ押おつよよ、そんならわいらわいら彌や知らぬしらぬなシ知らぬしらぬばさらば遣おつて聞きそふ併聲色遣おふおり、歌うたがなくてならぬしらぬが、わいらわいらうたつて、異ほかないないか、う歌うたといふても在ざ

郷者、白引歌を何とも知らぬ、
 い聲色の歌の文句がきまつて有、何とや
 ら、夫く、雨の降夜の一玄ほゆかし、此文句も何成共、
節を付てうたつ
 てくれ、そんなら節の何でもよいな、雨の降夜の一玄ほゆかし、東西く
 只今遣ひますが市川團十郎でござります、金ならたつた三百兩かねで可は愛
 ひ男を殺すか、金がほしるな、二八十六よつであ付られて、二九の十八よでつ
 い其心玄やいなとつともふ名らいもんじやいな、
アヨウ團十郎様く、
 團十郎の女役玄やな今の大方十七八な娘も成た所と見へて、可愛
 らしる風俗ふうぞく迄が思ひやられて面白いわい、
サマ一つ所望玄やく、今度
 のかふ金平か金時の様な、よ強い事がよからく、と請のよいの、
よ圖の乗の
テ、同強い事なら、夫く、そんなら瀬川菊之丞けいしやう、こいつに又可愛らしい名
 じやが若菊之丞わかじやくしやうの女役玄やないか、江戸一番の敵役、脊の高さが六尺
 餘りでふどり肉にくたとへて見様なら誰で有ふぞま、此國から出られた

てうど谷風と云ふ男、顔をまつかぬりちらし橋はしがしりからやれたり
くと、ミ脣色計シナガタの面白い、ついで身振みぶりも仕て見せう、おれが足を踏ふみ
度たど、そちらの石をひらつて来て、今の樽たるでもたらいたく、かつて合点あてん
と専内せひ是悲内ひひ、かけを打役うちやくぐれたりく、やれたくく、真此如くとふん
ばたがるハタハタ、菊之丞様きくのじゆさまく、椎しいの木四五本ごひんこだてよ取赤澤山あかさわさんの山千鳥せんじゆほ
ぞんかけたか掛千鳥かげせんじゆ、とんびりとしらからすりかゝ替かわつたハレ對面たいめんじや
なアと、何を云やらやくたいも、知らぬが佛ぶつそうそうがやつちやくやつちやくとほ
めよける、江戸兵衛エドヒサケ心付こころつき、かうしてへらく遊あそんだら、また頭かしらめが响ひびる
であろ、尻しりのこぬ内うちササと、籌はりかたげて銘めいくよとばかりかしこへ急ぎ行あま
さがる鄙ひるといへど風俗ふうぞくの都みやこと耻はずぬはげし地ぢの歩あるをひらふて象潟きさがたほ
前まへ娘文字むすめじがな摺伴どよきふて、乗物のりものつらせ玄くつづくと、とある木影このかげと立休たてやすらひらひ、
ふ文字摺どよきけふに先祖秀衡様しゆこうさまの命日めいじと相當あたれば、定倉殿廟參ていそうの筈はずな

れど公用乞げき中なれば夫も替つて自分が歩路かちぢを行も君への恐れ、そなたを一所ひとしょと伴ふも都々上使の入、駆走役ちくそうえきのそなたの夫祝言めいせんにまだせぬと言號いふうごの千賀之助嚴よ餘所ながら顔おほほも見せたし去ながら屋敷から餘程の道、そなたも定めて玄あんどから私わたくしの母様おはな様の、常からおひろいなされぬ道喫おはくお勞つかれでござりませふ、お使者儲けもちけの此床机せうぎ、ちとアお休遊くわうゆうしませど、親子の中も武家ぶけの武家堅かたい程ていなを可愛かわらし、調ヨイ家來けら共、暫く休足きゆくする間乘物のもののそこよ置木影かげ、休んで歸りを待まつ、サ文字摺じがきとかたへ成床机せうぎ、休ふ程ていもなく京都きやうの使者羽根川丹下、伊達千賀之助伴ふて玄あんづくと出來れべ、夫と見るゝ萩原藤治、二人が前よ兩手を突つき、先以て遠路の光鶴ひかり苦勞くろう千万、拙者義は定倉が家來萩原藤治憚のぞながら一つのお願ひ、先祖秀衡の目鏡めがねを以て、主人定倉代しろ預かる領地りょうちの内、今改めて明衡殿の支配しはい地じと罷成事、主命しゆめいもだしがたけれど、何共拙者其意むね得いたず。

此義意根の元となれば終は兩家の不和と成て、自と忠義を忘るゝ道理、今一應了簡有て、ほ割戻し下されかしと恐れ入てぞ願ひけるよゝ萩原の願ひ尤至極定倉殿と親明衡兩人意根を差挾まば鶴喜代君のお爲もいかゞ、丹下殿に思案有て、ほ割戻し遣されまいか、成ませぬ、何事も皆此胸又何とも云ずと扣へてござれ、ヤイ、若い者、此度の領地の事、主人鶴喜代の指圖計と思ふか、悉くも梶原殿内意を以てのほ仰其方如きの知る事ならず、上使より向つて過言を吐は、主人定倉の言付ならん、後日の祟りを待ておれど、倍よかしれば、こなたはむつと、鶴喜代君の仰と有べ了簡の付べき品も有ん、先祖秀衡武功よつて、館先みて取たる此國他家の差圖を請る様な主人でない、ヤ、緩急なり其音骨、切提てくれるんすと、切刃廻せばこなたも身構へ、既よ斯よと見へければ、象潟中へ分入て、くふ侍下されませ、自は定倉か妻象潟とア者モ最前らの家來が不禮、ほ立腹は

に尤^ガ慮外の段は幾重^ムも、了^シ簡下さらば添ふ存ます。なふ藤治、主
人様より我夫^ヲ、數代預かる領分なれど、他家へ上るといふで^ハなし同
家中の明衡様、殊^ム内縁有家へ、お預^ナさるを其様^モ、何を争ふ事か有^リ、
覽^ヒじませ。田舍武士と^テ者は、面^シが勝手^計必^ムお氣^ムさへられて下さり
ますなへ。其方は此様子、定倉殿へ早くやせ。何事も此胸^中合點が
いたか^ナ、早^ハ是^ニ非なくも、主命何と詞^ハへ無念を堪^ハへ立歸る、跡打見
やり。何象漏殿とやら、其元^ハ定倉の奥方とな、領分のせ^ハめられ嘸^ハ無
念^ムござらふが、主命なれば是非ない事と早く諦^ハつ^シやるがよい。コレ
千賀之助殿、其元親父預り地の外、十分の棒杭打せ、喰大慶^ハござらふの、
モ誰^シも箇様の目出度事似^ハる爲^ニ幕の内で、お盃^を頂戴致^ハふ。ヨレサモ兎^カ
のいらへもさつ玄やれぬ^ハどふでござる。其元の^ハ利分^ム成事、刑部殿
の差圖成^ド、一つは拙者^が勧^ハを以て、個様^ニ事を取計^ハくも、此國^ニ澤山成

金花咲陸奥の、金花咲は馳走と預んと參つたよ、不興の躰は心得ず。但
しハ使者をあなどるのかと、吃相替れば象潟へ、上使の前と差寄て、お氣
はうしゆお茶一つ、召上られて下さりませ。イヤ其元の馳走は請ぬ、かつふ
つ構ひ召るゝな、心得ぬは千賀之助、餘人の知らず某へは、逆様と這つく
べい、馳走答拜すべき筈、不快でござります。何とおいやる。此四五日は
きつう病氣が差發、一向人事も分りませず。夫故私は一家の事成けふに
馳走の其役と頼れました事なれば、何事も遠慮なく、仰付られ下され
よど、此場の時宜を夫ぞ共云ぬ色成一包、上使の袖へ差入れば、ちやくと
袂で乞びるて見俄と作る、ほや／＼笑顔、こゝ拗りそふいふ事で有たか。
夫の近頃は苦勞千萬、千賀殿も病氣と有、養生が大事でござる。早く薬
を用ひさつ乞やれ、象潟殿が取持なさるれば、其元は是とござるよも
及ぶまいよ、身共迎も痛癪持、おこりそふな其時の彼今のナシレ萬金丹か、金

勝丸、金の字の付妙薬を、給ると忽直ります。是から幕の内へ参り、瘡瘍の
養生ながら、は馳走と預りませふ。夫の何とお嬉しる。ヤ文字摺、千賀之助
殿のわの病氣も大軀で癒るまい。そなたの近頃大儀ながら、跡と残つ
て介抱頼。但し母が残らふか。アかと様のふつ考やる事、大儀な役を勤
るが、ちとなどお前へ私が孝行、夫へ、やお使者様、孝行な娘でござ
りませぬかいな。ヤ神妙な事でござる。あれなら娘のは馳走でも、隨分
とよからふが、モと云ても若いだけ、今のナシレ萬金丹、金花咲陸奥よ。心が付
ぬと我等が迷惑。若者へ若い同士、象漏殿よりは案内然らば、左様かふふ
入とぬり廻したる追従も、深き心の奥方へ伴ひ、幕へ入とけり。千賀之助
ハ默然と、思案取と後より心もだく。文字摺が、ヤ千賀之助様、お心悪
いが玄やうならば、お背中でもさすりまえやうかへ、縁なればこそ、深
切と問て下さる添い、只心得ぬ父の胸中、此頃はそなたの父、定倉殿共

中よからずさすれバ主人へ不忠の基きがが但たしは深い恩召有ての事か何なく
もせよ。どふも思案おもひ落付おちつけぬ。レまたあんなよそ事ことと紛まぎす様ような事計じけい、云號うひ
計けいみていつ呼向よむかなさる。やらほんほんと出雲いずもの神様かみさまへかけた願ねがひの驗しるし
て、思ふ殿おんぶへ嫁入よめいりをけふよあすよと待月日まづか短たんい冬ふゆの一日いちを、千年せんねんと思
ふ心根こころねを、ちつとちつと推量すいりょうしてたべと娘心むすめこころの一筋ひとすじと思ひつもりし、うらみ
なき千賀せんか之助のしやくも稻船とうせんの否いのよハ非あらず穗ほえ出て、靡なびく心こころの向むかへ人音ひとごゑあ
そこへ親仁おやじん様さま、本もとと私が心こころも知しらず悪い所ところへ明衡めいこう様さま、てふいふ猥わいらな躰から
見せたら直ただよ勘當かんとう請うける事こと、コリヤコリヤどふしやう木き隠かくれも七熊しちくまならぬ乗物のりものへ
ちいそふ成なて屈かみ居ゐる伊達いたての治郎じろう明衡廟めいこう廟參さんの下向道おとむかみ、幕まくぎは近く立た止とどり、
夫成おとこは文字摺もじにじりならずや、京都きょうとの使者ししゃは早はやか入いか、盼まなぶ千賀せんか之助のしやく今朝いま朝あさ
此所ところへ参さんり居ゐる筈はず、其方そのの知しらずやと様子ようしょ知したか、知しらぬのか、氣味きみ悪あくそ
ふふ文字摺もじにじりが、サ千賀せんか様さまはたつた今迄いままで、私わたしと話はなしやなどするお方ほうがやな

い、そふして常からお達者で、乗物は大嫌ひ、お屋敷はやござりませう
 早ふお歸り、なされませと何を、云やら玄どもなき、幕の内より羽根川丹下
 象瀉に前伴ひ出ヨレバク^調明衡殿先刻より待て、付ては其元領分の儀、拙者内
 外取計ひ、十分の棒杭打漸只今休足の所、嘸ミル満悦ミルモトでござらふの、
 遠路アリとゆ、懇節クンセツの計ひ身シム取て、いか計、某も今朝より早速参る筈の處、
 先君の廟所へ參詣、心外の不沙汰ウカルタ宥免ヨウム預りたし、則躬千賀之助、使
 者モハサ儲の其爲ミハシナ、其儀はお構ひ無用、象瀉殿の取持で、種シム馳走
 よ罷成ハチナ響應キョウエイの役人よ付置躬は此場カタマなく、頼みもせぬ、横合ヨコガの取
 持達世より物好な者も有物シム、お使者とどこやら、毒有詞聞名シテシテナ
 明衡様、其お詞ハシマ誰よおつ玄アシやる、最前是よ千賀之助殿、病氣の牀シダ見へ
 し故參りかゝつた氣の毒アシ、お世話シテナも一家の佳ヨシハシ其一家氣シムくいぬ
 心よからぬ定倉が娘の縁シナ幸シラフ我躬ワタシを取込シテで改給ハシメる領分シム割返ハサカさ

せん其爲み、お使者への追従輕薄、其方の猿智惠か、但し定倉が云付か。比
興至極な追従侍ヤア聞よくし明衡殿、縁談の内證事、京都のお使者もござ
る前聞捨よハ成がたし、定倉が領分ハ先祖の館先なまらぬ所、表裏を以
て、郡内を貪掠る明衡殿、ひらたう云バア國賊斯ヤのがに無念ならべ、お
相手又成ませうかサアに返答承へらんと懷刀抜掛て、詰寄く柳腰、傍み
あふく氣遣ふ娘、明衡の高笑ひ、ハツベコベと玄やべつたかな所詮
女ハ相手又せぬ、自慢なさるは亭主、泡を吹せてお目よ掛ん、ガ是々
ハ屋敷へ歸り、不所存なる盼めを真二つよ打放し、内縁をさつぱりと切
て仕舞ハどこからも手を入れれん氣遣ひなし、お使者又、お先へと
傍よ屹度目を付て、屋敷へこそ立歸る、行間遅しと乗物々、飛で出たる
千賀之助、日頃より似ぬ父の詞、刑部貝田又荷擔玄てお家を奪ふ巧よな、
何ともせよ意見をと、欠行吃相、マア待た千賀之助、今明衡の詞と云若輩

者の意見立聞入ぬのみならず、却て及よからりなば、お主へ忠義の命で、せく所で、ないわいのふ、今日の爲躰、明衡殿の心よ一物、所存有てか敵へ一味か、善惡分る夫迄、千賀之助をこつちへ人質牢獄がわりの此乗物、娘の部屋へ押込て日の目拜ぬ座敷牢屏風の内の轉賣夜もとつくりと寐さしれせぬ、そふ心得て覺悟しや、のふ文字摺、仮初ならぬ大事の人質、そなたよ番を云付る取込さぬ様相興よど、恥かしがるを手を取てむりよ押込ハく、いつ欠出さふも知ぬ囚人はだとはだとを乞め合て用心堅固よ油斷せまいぞ、嬉しそふな顔わいの、家來共乗物やれと引そよて歸るゝ粹の水上や衣川へと立歸る

○第八

秋のうれ風うれ氣いいやよ、玄めて寐る夜ナ下紐といて、裁の下露わしや耻かしい、武名の國よほころびぬ、衣川の館よ泉の小治郎定倉、花麗

を好みぬ奥座敷、庭へ代々経るものとあらの木萩の花の歸り、咲時を違へし人心穏ならぬ冬の空、庭より主従三人が手よみさらへ帯めの落葉枯葉を取捨て打水玉より置露もまがへて虫とや見へぬらん、主定倉機嫌能千賀之助、今日の其方が手傳ひて思の外早い仕舞、嘸草廻で有ふ休足仕やれ、ア是ハ痛入たるお詞、お前様こそ嘸お勞れ、何事もお構ひなく、ひらよは休足なされませとすしめよ定倉かたへの床机、腰打かけてたゞこ盈きせる取上薰らする煙ようざを吹はらす、花より餘念のなかりける、飛石傳ひ、歩み来る、定倉の奥方象潟、前跡より付添ふ文字摺、寮、年も二八の振の袖心ばへなら器量、なら京恥かしき品かたち、妙はしたが取よ、小竹筒組重數、を床机の元へ持はこぶ、奥方の玄とやかよ、御秘藏の花の歸り咲、いつも盛りの時分と違ひ、寒氣はげしき冬の空、毎日く、庭へ下り、持病でも發つてれど、文字摺より氣を付られ九献でも上たいど、

此子が手づから切刻所替れば品とやら、お氣はうるゝと一つ、お上りなされて下さりませと、笑酌ゑこぼるし挨拶あいさつみ謂、氣が付て心遣過分こころごがひく、花よ心を移し居ればうつ氣もせず、けつゝ土なぶりの身の養生やうじやう、梅平うめひらの次へ立て休足せいいと其儘部屋へ立て行、定倉じょうそうの打くつろぎ一献いつげんと取上る、娘むすめが酌くちみ一つ請うけたまひ、此盃このはの千賀之助、そなたへさそふ、一つ呑みやれ、此頃自身庭の掃除きようちを勤るも秀衡公寵愛ひでひらこうぢやい有し此萩夫故庭を清くするも先君よ仕る心時ならぬ歸り咲もお家の吉事を告る成ん、此もとあらの木萩きくわよ寄讀たる歌はゞ、何とやら、娘そちや覽へすや、ア成程せいぜい其歌そのうたの秋萩きゆうきくわの古枝ききよ咲る花見れべ、元の心こころの忘れざりけりい、いかいかももく、ある人萩ひときくわの一年づゝとして枯若葉かかれわかば々花咲よきを古枝ききよ咲ると讀よみしはとなんず、此萩草花きくわくわよあらず木也、一名めいをから萩といへ、よつて弓などのぞ是ことを作つくる、武勇ぶゆうよ長せし秀衡公寵愛ひでひらこうぢやい有しも尤よく、花の色いろも異木こなきよまさり餘國よぐによ双ふたご

ふ方なき名木、先君の秘藏の此木萩、一年又二度の樂しみ、去年と今年を
秋と冬、^{ハチ}面白の詠やと汲かはしたる盃の數々、廻る年毎、斯ぞ有かさ
風情なり、父の機嫌^御と文字摺が、何角願ひの有顔を見て、取母が^{ヨリ}文字摺、
父上へ今之事ちやつとくと教へられ、おもはゆげと手をつかへ、徒者
と思召も恥しけれども、云號^{ひひきづけ}の千賀之助様、一つ屋敷^や居ながらもまだ
祝言^{じゅげん}もせぬ殿は、父上の心情で、とふぞ今宵夫婦の盃、お赦しなされて下
さりませと、父より願ひ夫よは聞きけがしも懸のかせ、胸の結^{むすび}ばれもつ
れ糸只一筋の願ひなり、尤成願ひなれ共其盃へ追ての事^トと、云其子細
は明衡が此頃の行跡^{かうせき}刑部貞田^{さだた}と合^{あつ}体^{たい}せしか、去頃^{さうごろ}不和の中、彼か心底
さぐり見て、惡說^{せつ}よ極まらば其時こそ改て明衡方へそちが^{そぞれ}興入若又惡
事^じと組せしなべ、いふ迄もなく叶^{かな}ぬ縁と諦めよと、聞てがつくり文字
摺が、いつ果しなき盃の延る思ひのやるせな^ハ涙隙^{ひき}なき、有様^よ、母象箋

が引取て此頃上使儲の時明衡様の機嫌損じ夫故又自が伴ふて此館
 又置千賀之助殿折を見合せ詫言わびごとの自が心又有其上父ちちが明衡様又お
 遭ひなされたら祝言もつる出来る必きなく思やんな此國みて明衡
 貞倉といへば羽翼はねよの臣代々忠義を忘れぬ家明衡様又限りよもやそ
 いふお心の奥おくそふでない水みずの方圓はうゑんの器又隨したがふ油斷成とうざる此時節移
 り安き人心と詞の中又千賀之助定倉が傍そば又差寄さまよて同父明衡が胸中こゝろ
 定倉様こそ能く存じ主君を忘れ非道ひだら又組くみし同天ひとてん戴いたゞかず去ながら
 いか成天魔さうが見入くわよて逆徒ぎゃくとの氣きざしもいはゞ一家同友どうゆうのよしみ又
 謙言からんげんなし下さらば生々世々の厚恩こうおんと涙なみだと共とも又願ひけるほせつなる
 願ひ尤々しむし併義あわい又よつて一命は塵芥ちんかいよりも猶輕かろし君父ちちお又つかへる千賀
 之助若又明衡君又弓引心有ばハア仰迄あがもいはず君の爲國の爲父明衡を
 打て捨腹すてふくかつさべき父諸ちよ共冥途めいとの先掛さげ其詞そのことが武士の誓言せいごんたゞま

しや健氣けんぎやと、流石りゅうせき血筋けいきんの縁えんみ連つれ、千賀之助が心の中なか思おもひやつたる目め又濕見合あわせす顔ほの一ひと栗花くりはなもしほるも計そなへなり、折柄おりがら下部したぶが手てをつかへ、錦戸にしきど鷺五郎様さま入成いりせいと知らすれば、心得こころぬ、刑部けいぶが躬當國ごとうくにへ來きりしと、何なんよもせよ是ぜへ通とおせ、漏象娘ろうじようむすめも次つぎへ立ちやれと退立たたきだやり、衣紋繕いもんつくひ、待間程まつまつなく、入来る錦戸鷺五郎にしきどにしきど、都育そだちと名なふも似そなへぬ節くせくれ立たつし角前かくぜん髮疊がみたづなみさぱりも荒けあらげなさも大おほへい成なる頬ほがまへ、上座じょうざよどつかと押直おしのれば、定倉じょうそうへ異儀繕いぎつくひ、珍らしや五郎殿ごろうでん、先以さきて遠路とおじゆの所ところ苦勞くらう千万まんぜん、役用わくようの趣承きしようへらんと手てを突つば、拙者しょくしゃ遙はると參さんる事餘じゆの義ぎあらず、當時都ど有ある奸佞かんねいの者多く、やゝ共ともすれば主君しゆきんを害がいし、家國かくにを押領おしおりせんとの企くわく、愚父ぐふを始はじ貝田某まいだもい日夜ひやくをわかつず寐食しんしょくを忘れ、去よよつて間ま者じやを入い聞きたる所ところ、其逆徒そよどの張本ばりもとといふ、當國とうくにも有ある事明白じやくはいたるよよつて、貴殿ごだんと某ものを合あせ、國賊こくぞく共ともを
説捕せつぼ一いよ首くびをならべ國家こっかの歎かなきをしづめん爲ため夜よを日ひよつるで參さんつ

たり、こゝに存じも寄ぬ大變承つて驚き入シテ其反逆人とい何者でござる
 な、サレバサ其逆徒といふハ、貴殿と縁有伊達の治郎明衡は、承られペ梶原殿
 のに意と偽り、貴殿の領地へ棒杭打す是拵が彼僕人原と馴合て、定倉殿、
 貴殿又一揆起させ儕等が館へ引寄手を出さずして討取術、ニ合点が參
 つたかと同士討さする底巧み、千賀之助つゝと出ア聞えくし齧五郎、棒
 杭は君々のに差圖、父明衡が反逆とい、慥な證跡有ての事か、ハ、同し穴
 の子狐め、化の皮が顯れかしるでもがくは、此齧五郎を誰とか思
 ふ、當時肩をならぶる者もなき、錦戸刑部が二番ばへ、女童か使の様よ、
 其證據は环と口を閉て歸らふか、爰な大馬鹿者めが汝ときのなまざら
 けた玄やつ頬で知る事でない、おどがひをたしかずとそちらの方へか
 た寄て、ちよ／＼こまつてござい／＼、ヤ定倉殿貴公へ見する物有と、懷
 中より一通を取り出し、此一書抜見召れ、松ヶ枝節之助殿伊達明衡、いふ

かしと眉み皺、聞き見るより恸りし明衡妹政岡と心を合せ、鶴喜代君を
毒殺^{さざなう}及ベし定倉事^ハ某存る旨有^バ宜敷事を計^ハん。コト^ヤ是明衡自筆の
狀^{ナシ}何とばらうじたか、身動きならぬ此一通、ちよつと小口がこんな物
さ、逆も遙れぬ明衡親子可愛や、命が宿腐^{ねくさう}たか^{イマ}頬を見るも穢^{けい}らひしい
と、あく迄惡言嘲^{てら}笑^は、たまリ兼て千賀之助腹^{アキ}ムスヘかね^{キア}詞^詞が過る、察
する所汝等親子貞田勘解由^が巧^{ハシ}ムテ、父^を科^{スル}落さん爲^ハな、我^{すうりやう}推量^{スル}ミ違
ひりせじ、逆徒原一^ヨ面白させんと立上れバ^{キア}ど^コへく、あん々
わい成^{サド}素野良め、某親子を反逆^トは、圖^ハない事を^ミき出したな、其はしや
いだ音骨^{おと}を、切^カさげてくれんすと^ハ打^ハならしつゝ立^ハ、そふいふうぬ
をと、鯉口くつろげ、詰寄^ク血氣^{けつき}と勇氣^{ゆうき}既^ハス^ヤ斯^ヨと見へたりける、定倉
押とめ、五郎殿^ハお扣^ハへなされ千賀之助も扣^ハへておれ、明衡が科明白の上
ハ君の上意^を頭^{かぶ}載^ハ、討取^ム何の手間隙^{ひまぐき}、今兩人^{にんじん}刃傷^ハム及び此事世上

又流布有バ、國の騒ぎ大方ならず、事落去する迄、千賀之助ハ此方へ人質、最早籠中の鳥同然、五郎殿ニハ大切成討手の役目、何事もお構ひなく奥の一間で休足、酒一献召上られよ、某も長途の勞れ、然らば奥まで駆走、預らん、コヤ千賀之助、此世ニ居るも暫しが中、頼み寺へ人でもやリ、似合た様ニ念佛でもとなへて待ておれ、定倉殿は案内と、欲惡不道の大侍力み詰寄千賀之助、押へる定倉驚五郎打連一間へ入、けり、風かあらぬか、萩の本そよと物音忍びの姿、傍りを窺ひく足、出合頭ニ梅平が見る共しらず、曲者ハ、奥をさして欠入を、謂忍び入ハ何者ぞ、やと聲掛けられ振返りて物をも言ず、切てかゝるをかいくゞり、刀たぐつてかつぎ投拍子、落る一通を疾、より後ニ定倉が拾ひ取間ニ梅平が、何の苦もなく曲者をくしし上てぞ引すへたり、定倉封^ひヒ押開^{おしひら}キ、何々其方今日屋敷へ忍び入、小治郎定倉討取なバ、當座の褒美として、金子三百兩^{づか}遣^{つか}す者

也、猶恩賞おんしやうの功こうより寄よべし、伊達の次郎明衡めいこう、判左ばんざすれば彌々まみ彼が悪心あくじん、根深ねぶかくも巧とくなりな出でかした梅平めいへい、下郎げらうより似合あいあつぬうい奴やつ、今日けふより後日あさり未長く、武士士官より取立遣とりだてつてくれん、ハツ有難あやがた存奉するる、此上しおのながらいつハツ迄までも、お目掛めつけられて下おろされふなら、忝あざな存するますでござりまするを悦えび勇いのちむ折たたきこそ有あ明衡めいこう様さまに、合点あつてんの行ゆきぬ、斯こゝも仕つか込こし今日けふの時宜じぎ、此頃こゝろ不和ふわ成な我屋敷わらやしきへ、明衡めいこう來くるハ子細こまごまぞ有あん、梅平めいへい曲まが者もの取と遁とがすなど引立ひだつさせ座席ざせきを改か待まつ居ゐたる、早程はるひもなく、伊達の次郎明衡めいこう、家いえより杖突じょうつき年としばいや腰こしよりあずさの弓取ゆみとりのはりと意路いりゆとの岩疊いわねじり作つく袴はかまのひだも角く�ひし有あ不和ふわ成な中の中敷なかしき居ゐ目禮めいれい計はかりつと通とおる定倉じょうくらも一揖いっしゆくし珍めずらら玄くつろ明衡殿めいこうでん、いつぞやく何なんとなく、中なか絶致ぜきしせし某ものが屋敷わらやしき思おもひ寄よぬ只今ただいまの入來いりくわ、子細こまごまぞあらんは、成程せいじょう伊達泉いだいずの兩家りょうけい、誠まことに車くるまの兩輪りょうりんのごとく、何なんれを何なんれと甲乙かとうなく、國こくの政事せいじを預あずかるる兩人りんにん、水魚みずうおのごとく有あべきを、何なん故なぜ忍しのびを入い、某ものを討うんとの計かりしぞ

や、證據の忍びが所持の一通貴殿の頼みの状見られよと投出す。定倉取上打守、年老ぬれべ麒麟も土馬、流石も名を得玄明衡も刃金がむねへ迫りしな、其方の巧を仕損証方なさの破れ口、先そつちから白狀召れ、舌長し小次郎定倉、某も白狀どハテ、何を以て、アヤ鶴喜代君をなき者もせんと種の巧みを我能知る、最前召捕曲者が懷中の狀の文体、人知れず定倉を害せん巧みの證據の一通披見せよと以前の狀差出せばとつくと見巧んだり游へたり、似筆を以て某をたゞからんと愚かく、意根有ペ武士ら玄う名乗掛てなせ勝負はせぬ、腰拔侍を相手とする刃の穢れと思へ共立上つて勝負く、何事も露顯すれば、所詮叶ぬ死物狂ひ、狂人同然の明衡なれ共望み任せ、イサ勝負サくくと互み鯉口ちつ共歎さぬ氣配り目配り、とくよりこなたも立聞象漏心をひやす氷の刃一度もきらめく電光石火、かつしと合たる刃先と刃先胸の玄の

さへこぼるゝ如く、勇士と勇士の一世上の晴業福ひらりと白刃の刀はくじんノ刀マサニ待
た定倉殿明衡様もア待てど我身を玄づゝとつるゝと二人も尻居しりゐとど
つかと座しシテ武士と武士との争ひを女童わらべの知る事ならずヲハサ奥方留達
して怪我けが召るゝなと引取刀ひきとりのこア云事を聞てたゞ、女童とおつ志やれ
共先程からのは二人の争ひ、互々證據あて有ながら、夫と分らぬ其内うち、打
果いたなされて、兩家共々滅亡めつぱうし、先祖へ對しては不孝と云、主君へハ不
忠不義ふちふぎ、ハとつくりとは思案おもはと、詞立派ひづね又武家育合そだちす刃のこス打非太刀まが流石るせき
泉いずみが妻めぐみなりし、二人も顔を見合あわせして、實じつもく、負た子おぶたこス教おしられ淺瀬あさせを
渡ると譬たとのとく、今兩人ふたにんが打果せば、家の斷絶先祖へ不孝、併汝おなが巧うまいの
次第、急度せんき詮議さんぎする迄は、傍そばを放はなれぬ定倉と、納る刀明衡めいこうが、膝元ひざもとへ投出なげだせ
ば、こなたも同く刀をささ、明衡めいこうが魂たまも定倉じょうくわ付添つきあて、汝おなが底意そこおも白狀はくじょう迄
互は放はなれぬ詮議役さんぎやく、明衡めいこうが魂たまハ定倉じょうくわが急度きゅうど張番ばりばん、定倉じょうくわが魂たまハ明衡めいこうが急

度紅明後程迄々仕上を見よと、詞のせつば詮議の鏘際國々目貫の兩宗老別るゝ一間象潟も暫し休る胸の中連て奥へと入みける様子伺ひ轟五郎出る庭先差足拔足傍を見廻し以前の忍び共々木影を奴の梅平驚五郎様シ聲が高い親刑部殿の計ひよて伊達泉兩人を同士討させんと忍びの計略圖をはづさず爰迄は仕負せたり成程く疾々入込此梅平又國々殘る一味の面々彌々二心なき血判此一卷々と差出せべ、出かしたく併此連判を明衡定倉々見付られてハ事六づから、ヨリ汝ハ是を親人へ右の様子物語れ必人々見咎められな早くくに曲者ハ肌よ玄つかと納る一卷、然らば拙者ハ是ヲ直々早急げニ梅平ハ跡々残り某諸共何角の手つがひ早行と奥と表へ別れ行隔つ親子の仕切の襖明ても明ぬ明衡が跡々付添ふ千賀之助父が前々差寄て先程よりヤギとく貝田と縁有親人故主君々背く氣ざし有と證據を以て轟五郎が定倉

殿へ讒言ざんげんへ却て彼等親子が巧み親人と定倉殿互に疑念を生せさせ、一虎つい名よ乘ん爲との思へ共日比ひ替り利欲りよく迷ひし境論さかいろん何角の様子思ひ合せば、若や誠の不忠ふちゆうよりと現在血筋の某さへ疑ふ心の出る物もつ今まちくの人心、他人のうなが疑ひ尤至極よしきふ心を打明て定倉殿と心を合せ、お家おいえ又逆さかふ悪人原はら一いっよ紅明こうめいし、忠臣の名を立てたべと詞を盡つくし理を盡つくし孝と忠との一筋いつすじよ涙なみだ、血筋の誠なる明衡めいこうへ返答なく、諸手を組だる、こなたの一間障子ゆきやうじ開ひらて小治郎定倉ナニ文字摺ひがいせん、最前よりそちが願ひ、甚當せんとうをしてくれいとな、女の身よ似合あつあつぬ望望様子さまの何なにと尋たずられ、涙なみだながらよ顔を上、姫ひめさせの身のあられぬふ願ひ嚙むや憎にくしと思召おとづれ、不孝の罪つみ辨べんまへぬ、親と親との云約束ゆうやくそく、祝言しゆげんせねど殿どのにじやと、樂うきゑんで居る物ものを思おもひぬけふの争あつひ故、夫婦の縁も是切きり、成たら私わたくしや何なにせふ、どふ志しやふぞいないく、思ひ切れぬ胸の内うち、いつそ勘當かんとう請うけたなら、不和な中なかで

も武士の、義理もいきにも有まいと無理な思案も千賀様よ添たい計の
私が願ひ、人と思召れずと大畜生と思し切、願ひを叶へて給ひれどおぼ
こそだちのあやもなく譯わけも涙あわだもくくれ居たる、千賀之助の父の顔おほ打
守り恨めしげうら、いか程むかゆても返答かへもなされぬ、お心に一物有か、
忠義ちゆうぎより親おやぢをも討つ、誠まことにお家おやぢよ仇あだならべ、親子の縁縁をさつぱりと、お切な
されて下されい、不孝ふこうより似そたれ共、不所存成父上おやぢじょうと、一つでない主君しゆきみへ
云譯わけ、先祖せんそへの我忠義がちゆうぎ、さつぱりと勘當かとうとの、お詞願おことねひ奉うけると、口くちより云
へど心こころより、子として親おやぢへ不孝の悪口あくぐ、勿躰むたいなや恐ろしやと胸むねへせきく
る血あせの涙押あせへ、兼あわたる、風情也、治郎明衡聲あらひしげや、若輩者わばいしゃの云れぬ諫
言ことわり、親おやぢよ勘當かとうしてくれどり、他人ほかひとと成なて某まことに、またも勇いさめを入れん爲ためか、但
し云號いふあいの文字摺あざみ心迷まよふて其願おねがひか、何なんともせよ親おやぢよ向むかひ、慮外りよがいの我わが
弓引ゆきひ同然どうぜん、幸か飭せきる此弓矢目當的の襖ふすまの繪雪持松えすきじまの下くだり枝えだ、一矢いちやよ謝あや當とう

バ望の通り、勘當をしてくれんと投出す弓矢定倉も、^同文字摺、一旦組だ
る夫婦の縁親ゆかりん又かゆるハ女の操みさは、とハ云ながら只一人の我血筋、捨るか
捨ぬハ正八幡の教おとしへ任す此弓矢的めのハ襖の松の枝、射當バそちが望み
の勘當、早くくと親おやぢが互たが々詞替らぬ願ひ、ばつと一度ひとよ取上る、親子
別れを争あらそふ一矢、弓矢神の冥慮めうりょ、も盡果つくはたるか悲かなしやと、思ヘペ共とも手
もふるひ、目當めうぢもくるひ弓玄ゆゑぼる弓弦ゆみづるを傳ふ露涙、ねらむかためて文字
摺ながはが放す手の内はづるゝ矢先、するどき羽ひ、き千賀之助、目當違ながは松
の枝、射當る矢先我胸も、碎くだくる計、親と子の縁の切目と思ふ、ぞ弓、投捨
て、どふと坐し暫詞まことにもなかりける、明衡ハ勇の顔色おもていろ、勝負の一矢ひとよ射勝し
上あハ京都へ赴く伊達明衡いだめいこう勘當せし千賀之助、行末頼む小治郎殿こじやうでんと詞こと
文字摺千賀之助思ひがけなく驚く二人ふたにん、年月ときの本ほん望達し、嘸なまざくさつしに満足察
入、改云よハ及ベぬ共、刑部を始貝田直勝徒黨ともだを挾にへ鶴喜代君つるきよしを害せん

とする此時節、貴殿某兩人の内京都へ立越台朝、又達し事を糺さんと思
へ共、今諸士の別當たる梶原平三景時、錦戸刑部又内縁あれど、此度の
決談の地獄の上の足飛生て、歸らぬ此役義勤むべき貴殿と某互に
忠義を争ひしが、死るも跡とどまるも忠義のけつ着せん爲、躬共が
弓矢の勝負射勝し方が都へ出立、命を的の對決も星^{ほし}をはづさぬ忠臣、
武運^{よきうん}叶^{かな}ひし明衡殿^{まつわ}、お羨^{うらやま}ふ存ると詞^{こと}、明衡莞爾^{わらわら}と打ち笑み、貴殿
と某兩人が心を堅むる事を知らば、敵心を赦さずして、たんべいきうよ
若君を殺害せんも計られづ、敵^かの術^て乘^の不和成体^{なじみ}成したるも事を
延^{のば}する、互の計畧、最前取かれしる一腰は、死るも生るも兩人が忠義を
一ヶ^{イチカ}せん計略、又邪智深き鷲五郎彌々不和見せかけて、事の様子を
刑部貝田へ告和らせんと我計ひ、武士の身の上の人界へ生るより、君
も捧^{さげ}る身体入廻^{いりまわ}、時日を移さず都^{みち}登り、佞人原をことよく罪を糺し

て立歸らん去ながら、老生不定の世の習ひ父が顔をも能見置都へ登りし其跡へ定倉殿を親と頼み万事の差圖々隨ひて文字摺と中能添子孫の榮さかへを忘るゝな、又母逆も無き千賀之助、は不便頼む小治郎殿と、忠義ちゆうぎと撓ひるまぬ武士のぶよも、流石恩愛さすがおんあい捨すてがたき、身ふしょ簽さくへ千賀之助、文字摺も正体なく歎あわせけべ、俱ともよ定倉も、親子の心思ひやり、忍び涙なみだよくれ居たる、襖ぐらりと錦戸五郎錦戸五郎ア始終の様子とつくと聞、此上じじょうの汝等が息の根留のこんど懷中なかる、取出す鐵丸庭てつまるにわの面おもて投なげると其儘そのままもへ立つ狼煙ろうせん、俱ともよ盛のの萩の花、一度よ散ちやうて散亂さんらんせり、相圖あひずよ欠來けつらいる以前の曲者、庭先にわよつゝ立たり、五郎聲かげごろうこゑ狼煙ろうせんを相圖あひずよ寄掛よりつけんと、待まよ待またる刑部が軍兵、定倉殿の下知げちよよつて、こなたこなたよ仕かけしほうろく火矢、切きて放せば一騎いちきも残のこらず、微塵びじんよ碎くだて皆殺みなぎれし、此上じじょうの其方一人、最早最期さかうよ間まない尋常じんじょうよ觀念くわんねんせよ、汝が忍び

と願し我ハ熊川源五兵衛秀景逆意一味の連判狀最前我手入し上り
親子諸共逆磔覺悟くくと呼へつたり^同扱ハ僧ハ熊川よな斯迄仕込シ
我大望汝等如きが術^{のう}み乘^のうらかしれしか殘念^{ざんねん}や^ナ實^せてもの腹^{はら}いせみ
某^{もの}が豫て仕掛^しし地雷火^{ぢらいわ}よて俱^{とも}冥途の供^そせん覺悟ひろげと云せも
立^たず^{シテ}愚^{おろか}く^{シテ}地中^{ちゆう}よ陽氣有故^{ゆうき}時^{とき}ならぬ萩^{はぎ}の歸^きり唉^{あい}正^{ただ}しく敵^{てき}の巧^{たくみ}
て^{シテ}地雷^{ぢらい}の仕掛^しと計^{はかり}知^しり熊川^{くまがわ}よ云^い含^{ふく}衣川^{いがわ}の水上をせき入^はたる故^{ゆゑ}こそ
地中^{ちゆう}よ籠^{ふくら}りし陽氣^{ゆうき}を失^{うしな}ひ^{シテ}見^のよ花^{はな}ハ枯^か死^{しび}ぼむ草木心^{こころ}なしとヤセ共^おお
家の凶事を告知^{ほし}らえむ^{ほんじん}凡人^{はんじん}ならぬ秀衡公^{ひでよし}の惠^{めぐみ}の程^{てい}の有難さ先君^{ひで}寵^{ひぐみ}
愛^{わい}の此名木^{このなき}今^タ後^{アフタ}ハ此花^{はな}を先代^{せんだい}と名付^{なづ}べしと^{シテ}詞^{ことば}ハ實^{じつ}も大國^{おほくに}の花^{はな}
も實^{じつ}も有宮城野^{ありみやの}今^タも其名^{そのな}ハ世^よ高^{たか}し鷲^{しゆ}五郎^{ごろう}ハ死物狂^{しきものき}ひ定倉目掛切^{じて}
付^つるをかいく^レつてもぎ取刀^{ぎとり}其儘^{そのまま}はつしと首打落^{くちうり}し鷲^{しゆ}五郎^{ごろう}を討取^{うそく}上^あ
ハ兩家^{りょうけい}の疑念^{ぎねん}も晴渡^{はるか}る此上^{こうじょう}ハ二人の子供^{こども}婚禮^{こんり}を取結^{むすび}ん^{シテ}象漏^{じやうろう}取^あハ

す錨子てらし。不といらへて象潟ぞうがたに前心計の祝儀のまなび、三方土器取扱で、二人が前みならふれば、明衡頭打ふつて、源五兵衛の忠節さだねとて、惣の證跡出る上じょう、晝夜をわかず都へ登り、惡人原おにのはらを取ひしがば、躬みづひときの小事こまごとよかしはり、暫時の延引暫時の不患、早お暇ひまと立出る定倉暫しばしと抑止おさしめ、忠臣ちゆん一圖のほ老人おじいさんはやり給ふたまふ理ことりながら、過半刑部けいぶ一味いみの中なかに身一人參會有事、氣遣ふ義ぎより有ね共恐るおののしよ徳有とくとかや必々油斷ゆだんなく、尤成よせいしめし示錦戸刑部きんとけいぶへ取と足あしず、貝田直勝梶原かいだ なおかつ かじはらが威勢いせをかりて忠節さだねを、おほひ隠す術じゆ有共我又、義心ぎじんを表あらわし立、誠まことを以て押時おしときの神國しんぐの奇き特とくなぞやなからん、若や彼地かれよ變かわ有あば、若君ひそかを竊くわみ守護しゆごし間道まじみちを馳歸はせかへらん事、十日の外ほかに出でまじきぞ、其間の籠城くろうじやうを堅固けんごよ頼む、定倉殿じょうくわ、其義ぎのちつ共氣遣きうきひ有あな、本城ほんじやうよ楯籠たてこら種たね々の計略けいりく、諸卒しよそつをはげまし、寄來る敵てきを退立たいりつく、暫時ときも足あとめさせじま、いさぎよきほ詞ことば、千賀之助せんがのすけも其時そのときへ一

方を給はつて破竹のごとき堅陣なり共、義を金鐵はとて入井の字巴の字になぎ立く、野白のびよなつたる敵兵共追詰く、追散し、武術の程を試みん、詞いさましく、此熊川も楯籠たてふるらべ、敵の首をパ二三百、珠數じゆすうつなぎよしてくれん物、近頃殘念去りながら、寄手よ武功の者有て、思ひがけなく城外よ勢を伏置よせき不意ふいを討た、夫こそそ傳へ聞、野の伏勢有時とき歸雁連つらを亂すとかや、まつ此通りと松が枝えだよ打込うちり手裏劍てうりけん梅平うめひらが、眞逆様まかたようむざんの最期さいご、天晴あま、手の内うちと云智謀の程、末頼母數千賀之助かわ心置なく早出足あ然ぜんばお暇、再會なまく、頼がたなき夢の世や思ひ數ふう文字摺こしりが、賣せめて一日官仕くわんしきへ泣て見送る象潟ぞうがたが、互の心思ひやりこぼるゝ涙、押包おさむ、忠義の誠を顯す時節とき、かしる目出度出立めしゆでしゆだ涙なみ不吉と聲はり上、兵者ひょうしゃの交り頼有中たのみあるの酒宴しゅえんかなか、笑わらハ武士の別の涙忠臣ちゆうしんなりける

ア何とく、主人鶴喜代幼少みて家督相續仕み付、信夫の庄司、錦戸刑部、兩人後見仰付られしを國本の老臣共、不快又存罷在上某義京都在府又極られ、家中の仕置仕故高木風又憎るしの譬、信夫の庄司病死以後、錦戸刑部と私二人政事専ら又取計ひ罷在故自餘の輩、其誤有ん事を心掛、越度有んのみ目を付耳をかたむけ伺ひ、數年の間何ぞ一兩度の誤無事や有ん勿論毒殺又及、家を奪へんと一味徒黨を催せしなんど努力覺悟仕ふぬ義然所鹿忽の訴、明衡が偏執邪推、憚ながら此義賢察下さるべし、聊左様の企せん事、天の冥罰恐ろしと辨舌巧よ述ければ、梶原顔色快然と貝田勘解由がナ條一々理よ當れり、明衡最負の人有い、嘸赤面を致されん、と嘲弄、梶原殿の詞共覺す、添も公の政道を承り、理非明白を決斷し、親疎依怙最負又かしらざるを面々職分の心得、邪を糺す役人として身又邪をおこない、或い時の權威又誇て己又諂者を

助、己おのよ疎者うどきを罪つみよ落す。若も左様いその者有はば是ぜぞ誠の大罪人、誰だれもせよ、
となたなよも有あ急いそぎ召取り首討て獄門ごくもんの木木よさらすこと、政道せいどうの本意ほんいつな
らんと、諂へづらひ詫かがざらぬ其勇氣りゆき凜りんとしたるよ肝きもひしがれ開成程せいじやうく、左様いそく、重
忠殿ちゅうでんよハ氣象人きじょうじん、尤至極よし極よ存すると、座興ざけいの體たいよまぎらせべ、明衡めいこう謹つつしんて頭かぶを
下さ、貝田勘解由かいだかげゆが逆罪ぎやくざいの儀ぎ、先達せんたつて訴うへ奉はる通り、當鶴喜代とうづききよよしに限かぎらず、凡十
箇年以來の存立、其故ゆゑに若き主人お主の常つねよハ諫言けんげんを加へてさへ我儘わがむねさしお
こりこりこ事成ことな、又またかへつて近習きんしゆの者共そともよ舍す、亥いときりに姪酒ひめしゅを進め、奇妙院びみょういん
ととやを頼たのみ、下駄じゆたよ呪咀じゆその文ふみを書かせ、益ますよ放埒ぱはうよ本心ほんじんを取亂たらさせるの類たぐ
ひ、あげてかぞあそへるよ暇あまなし、仰あおぎ願ねがひくは、台命だいめいの憐愍れんびんなし下さされ、は亂ま
明願めいねんひ奉たまると恐おのれ入はいて訴うへれば、梶原聲かじわらこゑかけ、こゝこゝ勘解由かげゆ、明衡めいこうがナ處なよ
よ相違あらわ無なや、其方そのかたが返答かへつあよ寄よて存する旨むね有あ定だて覺悟かくご有あ事成ことなんと、心こころを付つれ
ば、貝田かいだのひれ伏冠ふくわん者太郎おとろうの近臣きんしんの内不身持うちふみ知しす者有は故ゆゑ刑部私けいぶヤ合あせ、

度より諫言仕る節へ、毎度異議なく得心致し、私拵出席の砌へ、酒宴遊興の
沙汰曾てなく後より承れバ、法外成事共に座有よし、據なく國本ヘテ遣
し、一門共罷上り、義綱を隠居致させしハ老臣共皆承知の所、私一人の所
爲どテ出る明衡が所存心得がたら、コトヤ貝田暫く待汝事を左右より寄云
譯立ると思へ、共自餘の儀へいまだ知らず、最前々廿餘箇條、とく其
方が罪、其職より居て其事を怠るハ大罪より有ざるや、ハ意恐れ入奉る、玄
かし、過分の役儀より付用事繁多より相勤罷有バ、義綱の放墳情弱晝夜傍より
是なき故存せぬ事へ力及バず、ナ詞多し貝田直勝、汝富樓那の辯をふる
ひ役人共を云掠めんと思ふや、譬バ其方、主人の家より大切成重寶有て、汝
が方へ預る時、盜賊の爲より奪ひ取れ、ナ某へ存す。さす盜賊の業成と油斷
の言譯立べきか、其方何より心得居る若き主人を預かる事器財の類の輕
きよあらず、往古周公旦成王を補佐し給ひ、清和の朝より良房の趣人臣た

る者の鏡たり、義綱の心亂れ行跡正しからざるゝ預人の罪誰よか譲らん、返答いかゞ直勝と、水を流せる詞の楯板くらきをしてらす明察めいさつの實日じにち本のかためなり、貞田の猶もすしみ出だべ、ほ意恐多く候得共暫くお扣へ下さるべし、明衡よ問べき義有、家の大事を訴るゝほ身一人引請、自餘の面おもてより一向知ざる脉、是不審ふしんの第一也、謀書ぼうしょを作り、僕人わくじんを集某あつめを無實むじつの罪ざいよ沈めんと計るひらめく、いかゞ成遺恨なるごん有ての義成や、是不審の二つ也、又諸士の面おもてより何心も無なく、汝一人詞くはを企台聽くはそだいてよ達奉る事、是不審の第三つ也、言譯有あや明衡めいこうと居たが高たかよ詰たづかくれば、こなたも膝ひざを立直たてし、汝辨くわんを巧たくみにして専まつらよ非ひをかざれど、何ぞ明衡めいこうを云掠かすめんや、某一人事を預るたまふるゝ深き意味有所あみて、其方如きが知る事ならずと、云も果はぬ梶原聲かじわらこゑかけくわん明衡めいこうそりやくらる、只今貞田が尋る所一つとして返答かへ답ひ及まず、意味有事あと後日のば延のぶし、我方われよ理有事あを只今急いそよ云立たてるは、コヤ是汝身勝手過すぎる貞田一

人より心得しか忝ひ決斷所よりて、諸役人をないがしろみしたるより
分甚以て奇怪也と氣色損て見へければ、已に意恐入奉る併ながら國本
の面より一列より上べき事成共一味徒黨の後難を恐れ私一人事を預り
上奉る近年國本へ申遣す仕置等道ならぬ事共少なからず心得がたく
存れ共いつの下知何れの指圖も梶原様の仰景時様の内意とや越
ざるゝ是なく當時一天下の間より置て梶原様の内意と有べ風雷の如く
恐入奉る儀刑部貝田が非道を訴へり時々憚ながら梶原様の責命をそ
むくゝ相似たり去り依て、ヨリヤ明衡、委細の様子詳也去ながら梶原殿より
限り左様の非道有ん様なし殊々景時殿にもつぱら歌人の聞へ有正直
の心を種とする讀歌其歌讀の梶原殿よも邪よ組し給へん但し覺ばし
此座有や何のく左様の事予が知る所より有んや定て夫の僕人共が此
梶原が威勢を借る者人を靡す謀事某の存せぬ事左様なくてハ叶ひぬ所

コレ 刑部貝田が巧成ん明白々白狀せよ、ア意恐入奉る併ながら我々
が謀計とい何を以ての仰、其證人ハ是ニ有ド貴人高位の恐もなく、
明衡が前ニむづと座す、珍らし浮世渡平、其方が證人とい、こりや
明衡と言合せ、某を罪ニ落さん巧ならん忝もは大名の旁歴シテ座の其
中へ其方ごときの出席は上へ對して恐れ有、且鶴喜代が後難共ならん
そこ立去と白眼付る、ちつ共臆せずくつゝと吹出し、今ニ替らぬ立派
の口上併某出るからハ大言の吐其音骨追付踏さいてくれん事も
なげ成一言ニ緩急也浮世渡平、某が巧みとい何ぞ體な證跡有や、ヤ盜人
たけドしいと俗語のごとく其争ひも今之内、某疾々入込しを、熊川共
源五共得知らぬ空氣共透を窺ひ奪取し此一巻ニ汝を始め、一家中も大
半ハ刑部ニ一味の連判狀、最早遁る所なし夫へ參つて繩かけよふ
か、但云譯の筋有か、夫ハサクレどふざやとのつびきならぬ證跡ニば

しもの貝田も口濱返答、亥どろゝ扣へ居る、庄司重忠威儀繪ひ^圖梶原殿
是よて事は落着せり、去ながら、証據と成べき其一卷改すんべ叶まじ、被
す是へ持參せよ、ハ明衡頓首して、ハ前より差出せば、景時殿イサに披見ひけん
何の是式見るよ及ず、其儘ままで捨置れよ、ハ左よりあらず、鶴喜代一家の納
りの此一卷の中より有、僕人共ともよ哆たらし欺欺かされ、梶原殿も一味なされ、其元の
は姓名此中より有ん事を恐れて披見ひけんなされぬかサ夫アよもや左様の事
有ありじ、然らば一所より見ませうと、兩人立合緒くく、貝田イシタの一生懸命
と面色いろ眞土まづちの如く、明衡熊川兩人の胸の曇りを吹拂ふきほふ、淀風よどかぜさつと押
開く、中より一字一点なく重忠しげただの唯不審顔ふしほほ、景時怒りの聲こゑあらしげ、汝等
兩人、此所を遊女遊山の座席ざせきと思ふや添も京都の決斷事けつだんじを猥りよ取計
白紙を以て證跡しよとい上うへを恐れぬ大罪人おほざいじん、隠書ひそかしょを持へ詞ことを巧貝田くわいだを科くわよ
落さん爲明衡一人の所存よあらす、皆鶴喜代の差鬪かたごならん覺悟かくごせよ汝

等と、一卷取て投付れば、兩人驚立寄て披見れば、白紙、明衡殿、源五兵衛、
 ○間事くの結構、實も執事の奥座敷、上段の間と座を玄めて、
 インテレイビ、コウキと唱ふる仙家の秘密文、鼎と洒ぐ潔淨水、棘の黒髪振亂し天と
 向つて渴仰し、明衡貝田が對決と落着すべき彼一巻、唐士廬江の水を取
 て、是成鼎の中と湛へ、洗落して白紙となせしも、奥羽二國を覆し先祖國
 香の修羅の忘執散せん事に今此時、心地よや嬉しやと襖と響うなり
 聲、疾方観ふ外記左工門ねらる寄て眞二つと打込刀曲者に又も唱ふる
 秘文とづれ次第くと手もすくみ思はず知らず取直し我と我手と數
 箇所の疵、夢のたゞちのごとくみて、よろぼふ足を踏きめく、爰ぞと切
 辻刀はかへり、真向二つと血の玄たゞり、鼎の中へ入る早陰陽激して忽
 と逆卷、水氣燃立炎折よく松ヶ枝節之助、さしもと重き大鼎片手と差上
 指付れば、血沙の穢嫌ふと見へそむける曲者早足の松ヶ枝姿と影の添

ふ如く玄りしと付廻せばうんとのつけよたはれ伏ハテ不思議や近
曾下屋シナヤ忍び君ミムラを守護する其折から鼠ヌマと化して系圖ケイブの一卷シナツ奪取シナツて立
退曲者シナツ何よもせよお家の系圖此方へ奪返シナツさんと立寄松ヶ枝曲者シナツひむ
つくとおきてシナツ豎子シカコ汝ミムラいか成強盛ガラザイ成共シナツ我又シナツ大室九丹金液經キンセキキヨウジンの法ハルを行
ひ雲シナツをおこし雨アメを呼須彌山シナツを拔介子シナツ隠れ自在シナツを得たる我幻術ハラフジツ汝ミムラ
下界シナツの鬼シナツとなさんシナツカワキヤシシナツヒインテレイシナツとせめかけシナツ唱ふれ共更シナツより奇瑞シナツの
見シナツへざられ節シナツ之助シナツきたいの思シナツひ抜シナツ外記左工門シナツが無念シナツの精血シナツ血汐シナツの
穢シナツれよ汝ミムラが仙術シナツ忽失シナツ天シナツの責シナツ我君ミムラを守シナツらせ給ふ氏神シナツのに加護シナツ成シナツ人シナツ
ハ有難シナツや悦シナツばしや速シナツみそこ立去シナツこまごと云シナツすと早く渡せシナツ譬シナツ仙術失シナツたり共汝シナツ等
如きよ渡さんシナツや速シナツみそこ立去シナツこまごと云シナツすと早く渡せシナツ○シナツ明衡シナツ其方
筋無事をシナツア某ミムラを科シナツえ落シナツさんと謀書シナツを捺シナツへ剩證據シナツなどと指上シナツし其一
卷白紙シナツを以て上シナツをあざむく汝計シナツの科シナツ非シナツす主人鶴喜代落度シナツと成シナツて家

の斷絶今此時覺悟せよ明衡と鎧打たしいて詰かくれば源五兵衛むく
りをよやし正しく館を出る迄紛ふ方なき連判状今白紙と成たるも汝
が胸又深き巧^{たぐひ}糺さんと立かしる明衡暫しと押としめ事又はやる
尤成共今荒氣を出してハ鶴喜代君のお爲みならぬがやとすて先と待
れよ何事も此胸又先く次へ立れよと老臣の詞是非なくも立ほく
次へ立て行、梶原聲かけ乍^は者共^と鶴喜代始一家の奴原とト^トく繩^{おさ}をかけ獄^い
屋へ引^ひ先待れよ梶原殿、貝田勘解由も暫く扣へよ^キ明衡證據と成べ
き一卷の白紙と成しと云も偽り、貝田を科^{いつけ}落さん爲汝一人が巧^{たくみ}で有
ふ、左様なければ鶴喜代も筋なき事を台聽^{だいぢやう}、又達^{たつ}し、上を恐れぬ科遁れず、
其方一人落命せば、主人の身の上別條なし、天誠を照し給へば死後又汚
名は自然と雲^{いふ}がん得と思案を廻らし召れ^{まわ}今又始ぬ重忠様の厚情^{こぢょうじやう}
粉骨碎^{よんこうさい}身仕^{さん}る共^は報^ほじ難きに示斯成上^{しらべ}の何をか包^{づま}ん、貝田勘解由^よ職を

こへられ、我威勢を奪へれし其無念やむ時なく、斯迄仕込し大望も、時至
らねば悔て歸らず、此上のほ願ひ、切腹の赦免しゃめん下さらば、神妙の詞至極
せり、其義の梶原さし赦す、早く仕度を仕れ、難有存奉る、跡々の義の重
忠様、心置なく最期を清ふべどほ請も明衡が無念の涙押隠し、心靜よ
手を合せ、南無松島大明神弓矢神正八幡、奥州五十四郡を照し給へ、
喜代のほ武運長久、我こそ武運拙く共死後より冥覽明らけく、是非潔白
を神國の印を顯へし給へやと、祈念の中より貝田聲かけア明衡、切腹とい
武士の冥加傍輩のよしみ某介錯かわしまくしてくれん、過分くわん、腹十文字とか
き切てカツと聲をかくる迄必早まり介錯すなど、無念の一言身も振はれ、
天、悪人アタマも組せずとい偽り成か、奇キ怪カクや、譬タチ骸カルダは死するとも、魂君の影
身カラ、添カタマリ僕人原カタハラも目メみ物見せんと、肩衣カタヒルはね退座カタマリを組で、差添カタマリも諸手カタマリをか
け、既カタマリよかふよと見へたる所へ、暫く待た明衡殿、松ヶ枝節之助是カタマリ在、貴

人出席の其中へ倍臣の參會を免め預ると、一卷片手も立出れば、貞田聲掛尾籠千万、既も以て事極た裁許をもどく懼れ多し、早立去ときめ付れば、からくと打笑ひ、汝が手足と頼んだる常陸之助國雄を殺し、家の系圖奪返す、又砂川の屋敷よて、傾城高尾平産の姫君、義綱公諸共も害せんとする汝が間者、此方へ召捕てうぬらが巧の底たらかず、最早遁れぬ覺悟く、舌長也節之助、既も以て明衡が差上たる連判状一字一點なき白紙、是則慥な證據、其一卷こそ子細有、國雄が幻術塞上べ印ぞ有ん明衡殿、實もと傍成一巻を、開けば姓名有くと元のごとく鮮也、明衡貞田をはつたと白眼、さんざう等き汝讀聞すみ及ねど、重て詞を出さぬ様、得と夫よて承れ、此度冠者太郎義綱、並も子息鶴喜代丸退且害せんと謀る事、則成就せば一味連判の輩、其功の輕重も應し、恩賞高祿宛行ふ者也、錦戸刑部太郎國純直勝と迄讀ぬ中二つも成てたほれ伏、血刀引

提飛鳥の如く奥の一間へ欠込バ、續松ヶ枝節之助遁さじ物と追て入、梶原俄々あひて出し、貝田めが死物狂ひ殊々松ヶ枝無法者あいつがあべれ出したらば我等ハお座よたまられず、ヨレ武勇自慢の重忠殿、組留てたべ頼入と膝ひざもがたく震ふるる重忠ハ脇目もふらず驚き入し貝田が手の内、伊達治郎明衡が帶する所の刀諸共速々切放せし。適名作、是こそハ先達て紛失せしとほゝ聞たる亂髮の一腰ならん貝田が巧明白々顯る其上又家の重寶出る事、鶴喜代の運目出度所と、劍戟を振其中又座席くすさず優ゆうとして座しるたる、寛仁大度ぞ見事也、次の二間ハ鏑音刀音手又取如く聞ゆれば梶原猶も尻居しりすまらず爰へ来るそ、うなヨリヤどふ致そふ重忠殿ヨシタケル仰あがくし梶原殿、何の是式子細なし、終日の對決よ拙者殆ど疲つかれや氣を養ふ箇様の時、足下の手前で薄茶一ぶく、一つぶくやら立腹やら、切腹しやうも知ぬしき、薄茶所々有べこそ折節風呂お風呂又火の氣ひのき

なし、爐の炭も繼かへず、本のはが冷火燧緩りとおあたりなされよと、尻
ぬ帆掛て走船梶原ほうく遡出る、貝田を中、熊川松ヶ枝、何れ勞ぬ早
業の目凄かりける。次第也、熊川の薄手を負、貝田を足下、節之助留めを
ぐつと差通せば、庄司重忠喜悅の眉、出かしたりく、貝田が帶せし一
腰の亂髪の一腰成ん、系圖の一巻家の重寶斯、一時、手入上、錦戸刑
部の遠流させ、家の榮の万々歳と仰、又兩人勇立祝ひ壽く池の龜千代の
榮を鶴喜代の威勢の朝日のぼるが如く實神國の人心頼もし共中
く、又計のなかりける

天明五年巳正月

伽羅先代萩終

明治二十四年一月二十日印刷
明治二十四年一月廿一日出版

編輯兼
發行者

日本橋區通四丁目四番地

内藤加我

日本橋區新和泉町壹番地
瀧川三代太郎

印刷者

發



日本橋區通四丁目四番地
金 櫻 堂

